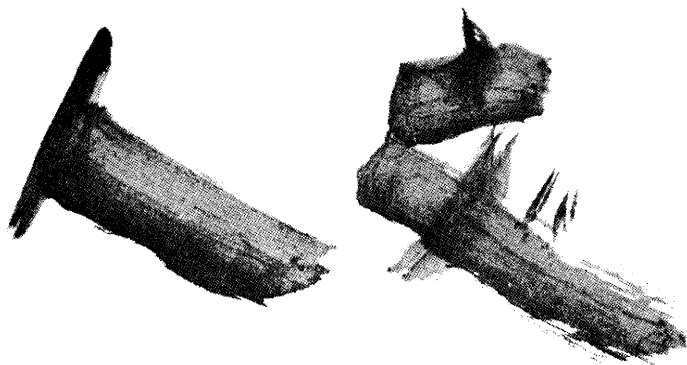




## 第四七号



2000

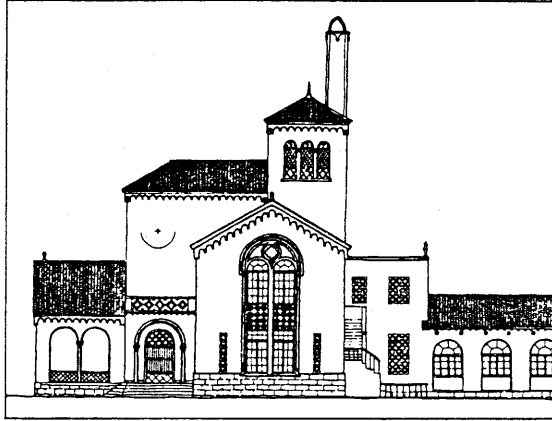
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

# 人 文 第四七号

1999年 1 月—1999年12月

も く じ



## 随想

日本でルーツを求めて

アスコ・パルボラ

1

古典文献学と哲学

荒牧 典俊

『国際ヴェーダ学ワークショップ』の周辺

井狩 彌介

## 講演

### 夏期講座

明治維新と古代文化の復興（高木）／漢元年の惑星集合（浅原）／臨床医学における時間の知——中国医学の窓から——（東郷）／創造のとき、進化のとき（阪上）

9 9

### 開所記念講演

中国近代における帝国主義と国民国家——日本のアジア主義との関連において——（狭間）／西学 of 伝来と明清時代の実学思潮（杜）／時間解釈と日本の影響——中国近代における過去・現在・未来の概念——（パスチドー・ブルギエール）

16

## 彙報

### 人文研の「たからもの」

閩版十三經注疏

古勝 勝一

### 共同研究の話題

無言をめぐる

横山 俊夫

ポルノグラフィー研究

大浦 康介

宴の後、言葉の森

宇城 輝人

中国共産党史の今日

江田 憲治

「訳経僧伝」研究班のこと

真下 裕之

所のうち・そと

新文房四宝の悩みと楽しみ

岩井 茂樹

古本屋と私

北垣 弘樹

ピュフとギャブ

高嶋 航

もうひとつのシュタイン肖像画

龍井 一博

一・一七が今伝えるもの

竹沢 泰子

親碗を叩く

岡本 稲丸

書いたもの一覧

44

35

30

28

20

16

9 9

## 日本でルーツを求めて

アスコ・パルポラ

八月、日本人の同僚が親切にも——彼の言葉によれば、京都の真夏の地獄から脱出するために——富士山麓にある別荘に私を招待してくれた。このもつとも有名な山と、五湖をはじめとする美しい周辺を見せてくれるという魅力的な申し出のほかに、もう一つ、私の心を強くひきつけるものがあった。私の「ルーツ」へ連れていってくれることを約束してくれたのだ。

先年亡くなった母は、一九一一年に長野県の諏訪で宣教師の娘として生まれ、幼年期を近くの飯田ですごした。祖父（すなわち母の父）が一九一二年から一九一六年までその地のルーテル教会の牧師をつとめていた。私のルーツへの探索を、私たちはこの飯田から始めた。その教会の、現在の日本人の牧師の方に電話でコンタクトをとったところ、日曜日の礼拝に招待してくださいました。私たちは教会でそれは暖かい歓迎を受けた。昼食のあと、教会の方々は諏訪へついて来てくださり、母の生まれた場所をさがしだすのを助けてくださった。私を何よりも喜ばせたのは、日本人のキリスト教徒にとって、その宗教が自分た



ちの日本の文化遺産を理解し評価するのを妨げるものとはなっていないことだった。諏訪への途中、駒ヶ根で、不動明王の化身とされる霊犬早太郎がまつられている天台宗の光前寺に、下諏訪では、勇壮な若衆によって山から曳き降ろされた大きな御柱が境内に立てられている諏訪大社に、牧師さんたちはすすんで案内してくださったのだ。

後日、東京へ行ったときに、池袋のルーテル教会へも訪れた。祖父は、その後、アメリカ合衆国のフィンランド人移住地で数年間つとめたあと、ふたたび日本に戻って、一九二三年から一九二七年まで池袋で日本人の聖職者の人達を教えたそうだ。驚いたことに、祖父が家族ともに住んだ家はそのままそこにあり、今も牧師の住居となっていた。日曜日の礼拝のあと、長年母の遊び友達だった日本人のご婦人にお会いすることさえた。

一九九九年の約十一カ月間、もつとも理想的な環境で研究にうちこむ機会を与えてくださっただけでなく、私の母が生まれ少女時代を過ごした国について知る機会を——私にだけでなく私の家族にまで——与えてくださったことに対して人文研に心から感謝している。私たちは全員、すっかり日本と日本文化の熱烈なファンになってしまった。

ヘルシンキ大学教授（インド学・南アジア研究）  
京都大学外国人研究員（一九九九年二月—十二月）

（訳・藤井正人）

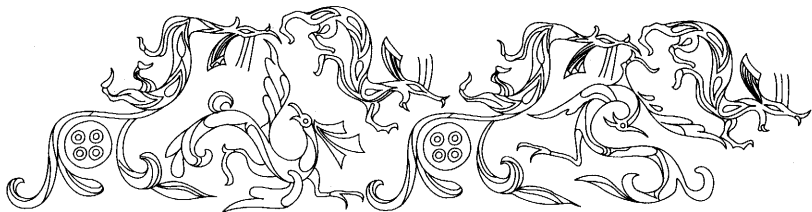


## 古典文献学と哲学

荒 牧 典 俊

現代の科学技術あるいは生命科学時代の歴史の洪水のような流れの中にあつて、大学とは何か、研究所とは何か、と問うて、ただ単に科学技術や生命科学の洪水の流れをリードしようと競い合つていく、そうしながら押し流されていくだけであつてはならない、大学や研究所こそ歴史の流れから自由であることによって、新しい文化を創造する源泉であるのでなくてはならない、と答えるならば、それは、そうかも知れないと賛同していただけるのではないか。

それでは、歴史の流れから自由であり、新しい文化を創造する源泉が、われわれ人間の心の内にどのようにして開かれてくるか、と問うて、そのためには、ヨーロッパであれインドであれ中国であれ日本であれ、太古以来現代に至るまでの歴史における文化創造から学ばなくてはならない、そこで古典文献あるいは史料を文献学的にあるいは歴史学的に研究しなくてはならない、ともかく古典に学ぶことによつてのみ、われわれ人間の心は、歴史の流れから自由になり、新しい文化を創造するイン



スピレーションにふれることができるのだ、と答えるならば、それも、案外そうかも知れないと思っていただけであるうーそれが結局われわれが現在研究所においてしていることであるから。

しかるにそれでは、われわれ人間の心が、ほんとうに根源的に自由であり創造的であるためには、どうしたらよいか、と問うて、古典文献学だけではどうしても自由がちっほけになりがちだ、歴史学だけではどうしても創造のインスピレーションが枯渇する、それらは何らかのしかたで、かぎりなく根源的に自由であり、創造的に思惟する哲学に開かれていなくてはならない、と答えるならば、わたくしは、たちどころに猛然と反駁されるか、もっとおそろしいのは、いつものやりかたで冷たくあしらわれるか、である。

わたくしはそのことを知っているから、これまで九年間、貝のように口を閉ざしてきた。しかし、最後に発言の機会を下さったご厚意に甘えて言わせていただく。わたくしは、研究所で必要とする人材として、何も具体的な誰かを念頭に置いて言っているわけではない。大学で哲学を専攻したかどうかは、どうでもよいことだ。そうではなくして、かぎりなく根源的に自由かつ創造的に思惟する哲人であれば、必ずどこかで黙々と思惟し続けておられるのではないか——かつての今西錦司先生や上山春平先生のような。そういう本物の哲学者が、いつの間にか、いなくなってしまったままであって、ほんとうにいいか、と問



うてみたい。おそらく、かえってくるのは、ブラック・ホール  
のように無気味なしじまだけであるにしても。

時の流れ―死神―の大鎌が、君を根こそぎ切りとっていく  
ときに、

いったい何をすることができようか。

もしもミューズの神のインスピレーションによって

永遠の詩をうたっているのではないかぎり。

*And nothing against Time's scythe can make defence*

*Save breed to brave him when he takes thee hence*

(Shakespeare, Sonnet 12)

(breed to brave him 「子孫があつてこそ、死神と勇敢に戦う  
ことができる」というのを、「ミューズの神のインスピレーシ  
ョンによって永遠の詩をうたっている」と訳すのは意識に過ぎ  
るが、それがこのソネットの主題であり、この句の意味すると  
ころだと解する。)



## 『国際ヴェーダ学ワークショップ』 の周辺

井 狩 彌 介

昨秋の十月三十日から十一月二日にかけて、人文研創立七十周年記念のシンポジウム・シリーズの一環として『第二回国際ヴェーダ学ワークショップブーヴェーダと初期インド文明—(The Second International Vedic Workshop: The Vedas and Early Phases of Indian Civilization)』を開催することができた(京大会館、京都市国際交流会館)。前回ワークショップが一九八九年にアメリカのハーヴァード大学で行われたが、それからちょうど一〇年になる。その報告書もやや遅れて近年に刊行され、親しい各国の研究者のあいだからそろそろ次回をとうやりとりがされていたのだが、私が主催を引き受けるはめになってしまった。いずれにせよ、研究者仲間にうまく乗せられたということになろうか。

当初は、日頃情報をやりとりしている各国の研究者仲間を中心に、少人数で顔を突き合わせておしゃべりをする小規模な国際シンポジウムぐらいのイメージ(「ワークショップ」の名称





にしたのはそもそも共同研究の延長ぐらいの想定だった）で計画を公表したのだが、インド学の電子メールの国際ネットワークなどで取り沙汰されている内に電子メールとファックスでの参加希望の数がどんどん膨れ上がってゆき、実行委員会の中心に居た私と藤井正人君とは次第に不安になってきた。国際的な関心の高まりは嬉しいのだけれど、あまり大規模にするとふつうの「学会」になってしまい、当初意図していた親しい研究者のインティメートな集まりの枠を超えてしまうのではないかと思われたからだ。また、当初に想定した予算枠を遙かにオーバーする恐れもあったし、参加者をすべて滞在させる施設の確保も簡単にはゆかない。しかし、いっぽう送られてくるレジメだけで報告発表の質を選定して取捨選択することには難しい問題がある。いくつかを断つたものの、結局、国外から八カ国二十五人をふくめて、総数約八〇名という当初予想した人数の二倍以上のシンポジウムとなった。学会前の数週間と学会中は主催者としては心理的に綱渡りの連続だった。さいわいに無事に全日程を終えて、参加者からは内容、運営ともに望外の好評を頂くことができた。

今回の学会準備を通じてあらためて実感したのが、なんといっても電子メールの威力だった。いくつかの国を除いて、ほとんどの研究者がIDを持ってふだんにこれを利用してしている現状では、これがつとも効率的な連絡法である。すべての連絡の九〇パーセント以上が、電子メールでおこなわれた。（また私

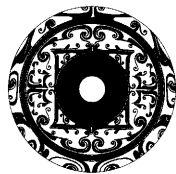


のように日常の事務整理能力に欠ける場合は、ファイルの整理を効率的に行うメールソフトはありがたい存在でもある。電子メールの普及により研究の情報交換が早くなったということはここ一〇年ぐらいの間に実感してはいた。たとえば、新しい発見をアメリカの研究者に知らせると、翌週にいくつかがヨーロッパからこれについての問い合わせが入るといふ具合で、われわれインド学の分野でも研究情報のスピードが格段に早くなっているようだ。

また、連絡作業を通じて、各国の研究者のあいだでのコンピュータと電子メールの普及の状況が大体みえてくる。研究分野にもよるのだろうが、フランスやロシアなどでは意外にまだ手間がかかる場合が多い。インドでは人文科学の研究者の個人レベルではまだ連絡が取りにくい状況である。やむを得ない場合は国際電話と郵便で連絡を取るわけだが、電子メールによる連絡を日常にしているとこれらの従来の方法がまだるっこしく感じられてくる。ただし、逆に緊急を要する時点でのコンピュータの故障は致命的でもある。この学会準備の期間中は、またコンピュータのありがたさと思さをとともに実感した日々でもあった。



## 講演



夏期講座（一九九九年度）

七月九日—十日  
於 本館大会議室

テーマ「時のデザイン」

## 明治維新と古代文化の復興

高 木 博 志

「時のデザイン」のテーマのもとで、古代文化が奈良という地域で、いかに創り出されたかを考えた。

なぜ近代において「古代」が重要か。たとえば一八八〇年代にロシア公使柳原前光が、十九世紀後半の国

際社会は、列強各国が固有の古い歴史を有する、文化的「伝統」を競う国民国家の相克の場であるとし、単一の「ヨーロッパ」文化はないと論じる。したがって日本における独自の文化的「伝統」の創出は、始原の古代文化の復興という形をとって、国際社会を射程においた「一等国」になるための戦略として立ち現れる。たとえば岡倉天心は、「日本美術」のはじまりとしての古代美術史をつくりだす。それはギリシア・ローマに匹敵する古典古代が日本にもあるという、ヨーロッパ美術史の語りにつた美術史である。それと同時に、日本の天平彫刻を頂点とする古代美術は、欧米にも中国にもない、固有な美術であるとし、国宝という概念を生みだしてゆく。

古代文化の復興は、神話の古代と歴史的古代の二つの内容を有する。これら古代文化の復興は、一八七七年の明治天皇大和行幸を政治的契機とし、一八八〇年代に、立憲制を射程において、展開してゆくことになる。

神話の古代の復興としては、明治維新の神武創業の理念の視覚化、幕末の神武陵の造営、神武天皇をまつる橿原神宮の創建、そして日清戦争後の畝傍山山麓の神苑形成をへて、紀元二千六百年事業（一九四〇年）に至る。歴史的古代の復興は、フェノロサ・岡倉天心

が手をつけた法隆寺・興福寺などの古社寺の復興、皇室財産としての大和三山や正倉院御物の形成、一八九九年の帝国奈良博物館の発足、吉野山・奈良公園などの名勝や平城京・古墳などの史蹟の整備・保存として展開する。そして明治期の文化財の体系的な調査が、制度としての日本美術史成立の基礎作業となる。のちには和辻哲郎『古寺巡礼』などの大正以降の教養主義、そして観光や学校教育を通じて、古代文化をめぐる国民的な「常識」が定置され社会に浸透してゆく。



近現代の神武天皇像



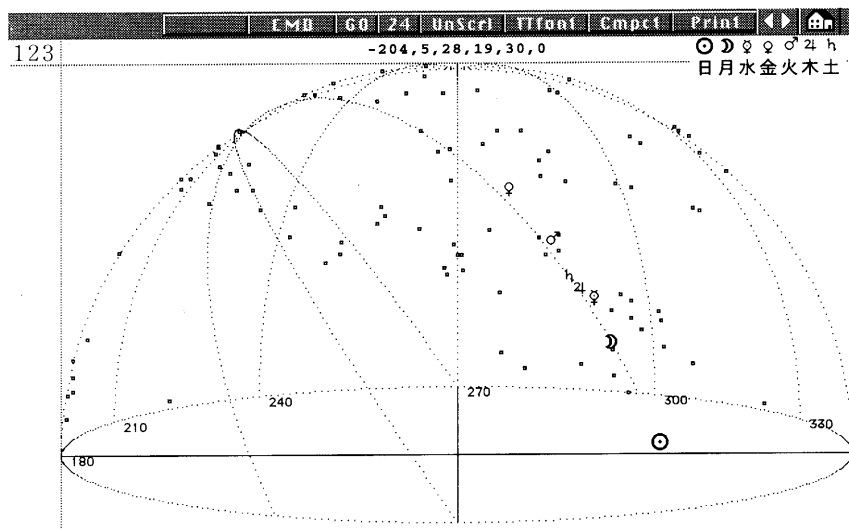
近世の神武天皇像

# 漢元年の惑星集合

浅原達郎

齊藤国治『古天文学——パソコンによる計算と演習——』（恒星社厚生閣、一九八九年）は、これを読めばわたしのような天文学の素人でも古代の天体の位置を計算する方法がマスターできるといふ、たいへんありがたい書物である。中国古代の天文記録の自力検証を可能にする道具が、これで手に入る。

『古天文学』では、一九八〇年代に全盛だった「パソコン」の利用が前提とされて、サンプルプログラムも今ではなつかしいベシックで書かれている。ただし、読者はそれぞれの環境に合ったプログラムを自分で工夫しろというのが齊藤先生（書物の上での一方的な師事であるがこう呼ばせていただく）の教育方針である。プログラミングにも素人のわたしにとりえた選択肢は、ハイパーカードというソフトウェアだった。付属する言語ハイパートークをちよつと勉強すれば、専門のプログラマでなくともかなりのことができるよ



紀元前205年5月18日19時30分、長安、西の空

うになる。技術の急速な進歩にとりのこされて、ハイパーカードも今ではすっかり過去のソフトとなつてしまったが、わたしはいまだにこれを愛用している。インターネット時代には通用しないのかと思いきや、ウェブサーバ上のハイパーカードをウェブブラウザから動かすという新たなあそびをつい最近知ってしまった。

あきつぽくて怠惰なわたしは、『古天文学』を読みながら、ハイパートークを使ってひとつひとつスクリーンを作成し、演習問題をひとつひとつやりおわるのに、数年をかけてしまったが、ともかくこうして歴史上のある時点にながめた夜空を自分のコンピュータで再現することが可能になったのである。そうなるのとそれを人前でうれしげに披露してみたくなる誘惑から、素人はとかく逃れがたい。夏期講座の担当に指名されたのをよいことに、その実演に及んだ。

漢の高祖劉邦が入関したおりに五つの惑星が東井（双子座）に集まったという、有名な伝説をとりあげ、その前後の惑星の位置を計算して、当時の人が実際に見たようすを再現して楽しんだ。劉邦入関のときには必ずしも惑星集合は起こっていなかったが、その翌年から翌翌年にかけて見られた天体ショーは、なかなか見ごたえのあるものである。やはりハイパーカードによる「プレゼンテーション」を行ったのだが、コンピ

ュータともどもひとむかし前の製品なので、モノクロの地味な画面しか映し出せなかったところに、素朴な手作りのよさを見出してくださった方があれば、喜ばしい。

## 臨床医学における時間の知

——中国医学の窓から——

東 郷 俊 宏

「真人」、「薬王」などと尊称される孫思邈が七世紀中頃に編纂した『千金方』の巻二十六「食治」は、タイトルが示すごとく種々の食養生の方法に言及しているが、このなかに「凡常飲食、每令節儉、若貪味多餐、臨盤大飽、食訖、覺腹中彭亨短氣」という記述がある。最後に見える「短氣」は、今日の用例と異なり「易怒」の意ではなく、「呼吸（氣）が速い（短）」ことを意味しており、この条文は過食時に、腹部の膨満感とともに呼吸の促進がみられることを述べているのだが、過食時の身体状況のひとつとして「短氣」という呼吸

の状態を取り上げている点に興味を惹かれた。今日でも食べ過ぎた時に腹を抑えながら「ああ、息が苦しい」と口にすることはあるが、「息が速い」と表現することは稀であろう。微細な事柄ながら、身体症状の記述 (Nosography) という観点からはごく重要な問題である。そこで私は健康成人を対象に、過食時に呼吸が普段より速くなるかを実験的に検討した。呼吸状態は少しの刺激や環境の変化に左右されるため測定には困難が伴ったが、結果はほとんどの被験者において呼吸の速度がみられた。実験方法を変えれば、寝たきり老人や車椅子に乗った状態にある患者の呼吸状態の測定にも応用し、孫思邈の指摘を今日の我々の「体感」に照らして食養生の意味を問い直すこともできるはずである。

食事後に呼吸が速くなったからといって直接生命に関わるわけではなく、それがどうした、といわれればそれまでである。しかし、食事という日常繰り返し返される営みの中でみられる呼吸リズムの乱れに敢えて注目している点が重要なのである。孫思邈と同様の指摘は『太平聖恵方』でもなされており、呼吸リズムと養生が強く結びつけられていることをうかがわせる。

魚にあって安定した呼吸を保証する鰓が、人間においては呼吸と関係ない顔面の表情筋となっていること、

しかも鰓が平滑筋であるのに対し、人間の呼吸筋が体壁性の随意筋であり、それゆえに人間の呼吸リズムが極めて不安定な状態にあることを進化論の立場から論じたのは故三木成夫氏である。また西原克成氏は三木氏の学問を継承したうえで、人間の本来の呼吸が鼻呼吸であり、口呼吸を行う人が相対的に多い日本人（極寒地で喉のしもやけを起こすのは決まって日本人という）に、自己免疫疾患の危険性を指摘する。自身でバイオリンを弾き、「息詰まる」ことのない「憶」の状態を健康と考えていた三木氏の学問の根底にあるのは、「リズム」に対する優れた感性であり、これを形態学に取り入れた故に学問的には異端視する向きが強い。視覚化して説明することが困難な「リズム」にどれほどのリアリティを置くかによって、学問のあり方も大いに変わってくるのである。

私は舞台照明に関わっていた頃、なぜ照明家と舞台美術家の仲が往々にして悪いのか疑問に思ったことがあるが、その原因もおそらく同じ点にある。「絵として美しい」照明は、生きている舞台にあって必ずしも「よい」照明ではないのだが、なかなか舞台美術家にはそれが伝わらない。

「ひといき入れる」、「息抜きをする」、「息が詰まる」といった、「息」にまつわる言葉も次第に私たちの日

常から消えつつある。心臓の拍動と並んで私たちの身体の動き、リズムを律している呼吸について、現代の私たちは鈍感になりすぎてはいないだろうか？

## 創造のとき、進化のとき

阪上 孝

時間についてはさまざまな哲学的議論がありますが、今日は『創世記』とダーウィンの進化論を対比しながら、時のデザインについてお話しします。

『創世記』では、神がそれぞれの生物を個別に創造し、天地創造の最後の日に人間を自分の像に似せて創った、と書かれています。つまり生物の「個別創造説」と種の不変性、人間に与えられた特別の位置、つまり人間と他の生物の不連続性です。また『ダニエル書』では、古き世の終焉である最後の審判が説かれる。この終焉は単なる「終わり」ではなくて、神が天地を創造した目的の達成です。だから『創世記』の時のデ

ザインは、「始まり」と「終わり」をもつ目的論的な時間です。

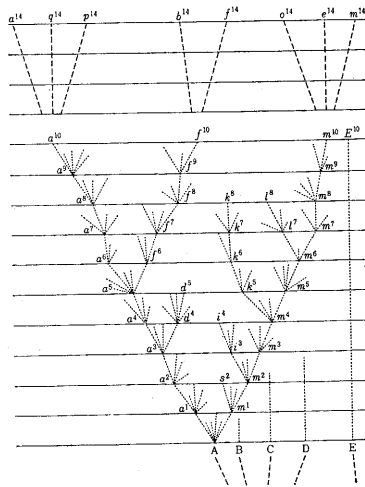
『種の起源』はこのような時間観念を根底からゆるがします。種が進化する、あるいは進化によって新しい種が生まれるという主張は個別創造説と種の不変性を否定します。ダーウィンによれば、進化は生存闘争と自然選択によって行われます。生物個体の増加と生存条件の変化という条件のなかで、より有利な変異をとげた個体が生き残り増殖することですが、変異は方向をもたず偶然に起こることではないし、生き残るものもその時々条件によりうまく適応したということではない。こうして目的論も否定されることとなります。また、小さな変異が累積されて新しい種が生まれるのだから進化は連続的であり、生物界における人間の特別な位置も否定されます。

ダーウィンの生きた時代には、考古学と地質学が大きな進歩をとげました。それとともに、人類の誕生は旧約聖書がいうよりもはるかに古いことが明らかにになり、ノアの洪水のような激変も疑問視されます。いいかえれば、キリスト教の伝統的なタイム・スケールがゆるがされたということです。

こうしてこの時代に、神のデザインにもとづくキリスト教的な時間観念にかわって、連続的で無目的な時



間観念が提起されることになりました。天文学の進歩によって地球が宇宙の中心でないことが示されたとき、パスカルは「宇宙の無限の空間の永遠の沈黙が恐ろしい」と述べて神学的宇宙観の崩壊による意味喪失に対する恐怖を示しました。ダーウィンの進化論は時間に関して、同じような問題を引き起こすといえるでしょう。時間というのは、私たちが生き、感じ、考える上で最も基本的な観念の一つですから、時間観念の変化は大変大きな意味をもつ問題です。ダーウィンの進化論は科学の一分野のみにかかわる議論ではなくて、時間という人間にとって最も根本的な問題にかかわる議論だと考えなければなりません。



進化の樹状分岐図（ダーウィン『種の起源』より）。  
「始まり」も「終わり」も、明確には示されていない。

開所記念講演会（一九九九年度）

十二月十八日  
於 本館大会議室

中国近代における帝国主義と

国民国家

——日本のアジア主義との関連において——

狭間 直樹

中国の近代とは、東アジアに中華文明として屹立してきた伝統的体制の変貌と再編の時代である。再編にのつての中心環は、中国を近代的国民国家に改造することだった。そのための営為はとりわけ、日本との深い関係をもつて展開される。日清戦争後に、復讐ではなくむしろ日本との提携の動きが一段に高まるが、湖南や上海での、清国「保全」を掲げた日本のアジア主義運動に呼応する動きもその一つの現われだった。

上海で動いた亜細亞協會は歴史のある団体で、その機関誌編集者吾妻兵治、岡本監輔らは、福沢諭吉の

「脱亜論」とは逆に、日清両国は「往来交通」を盛んにし「交際を密」ならしめて、「隣交を敦くし、富強を致す」ことを目指すアジア主義を抱いていた。その交際は「欧米の化」と同様に「下から」の、心の通い合う「士庶」の交際でなければならず、しかもそれは、西人に握られている商権を回復して、各人の「私利の追求」が両国の「公利の実現」を結果する、そのような経済的基盤の上に築かれねばならないとした。

一八九九年十月、重野安繹、三島中洲、吾妻兵治、松本正純らは、日清提携の理念と経済活動の実際を結びつけ、日本が受容した西洋の「新法」を中国に提供すべく善隣訳書館を創立した。同じ頃、実際の事業に着手するには至らなかったようだが、岡本監輔も重野、三島らの支援を得ながら、同様の主旨に立つ善隣義会を構想している。

かれらの試みは、内藤湖南と蔣国亮の天津での問答にも明らかのように、中国の改革派知識人の希望にも沿うものだった。善隣訳書館がまず刊行したのは、重野『大日本維新史』、ブルンチュリの書の吾妻訳『国家学』、石井忠利『戦法学』および『日本警察新法』（未見）の四点である。いずれも日本の経験を隣邦の近代国家の建設に役立てようとの意図をもつもので、たとえば『国家学』の吾妻の序では、明治日本の建設

に有用だった同書が隣邦諸国にとつて「鴻益有りて小弊無きもの」と断言している。

出版事業の正常な発展のためには、著作権法の整備が不可欠だが、この時、清国ではそこまで進まず、善隣訳書館のまっとうな事業は蹉跎する。この間の一連の事態は、近代国民国家への再編に失敗した中国と侵略的帝国主義へと邁進する日本との、今ひとつの重要な分岐点なのであった。

## 西学の伝来と明清時代の 実学思潮

杜 石 然  
(佛敎大学教授)

西洋科学文明が本格的に中国に受容されるようになるのは、清末になってからである。しかし、中国の近代化を考えるうえで、その前代の史的展開、すなわち伝統科学がどのように発展してきたのか、そして明末清初にヨーロッパ宣教師によってどのように西洋の学

問が紹介されたのかを、振り返ってみるべきである。

中国科学技術史上、漢代には後世の規範となるべき多くの成果が生まれた。魏晋南北朝になると、インドを初めとする西域文明の伝入により、新たな刺激が加わった。唐代中葉より始まった土地私有と土地売買は宋代に加速化し、農業生産は大いに増長した。同時に紡績・製紙・造船・兵器製造等、各種の手工業も著しい進展をみせ、中国古代三大発明に数えられる火薬・印刷術・指南針もこの時期に實際面での応用が大いに進んだ。宋元期の科学技術は、伝統科学の絶頂期を迎えたといつてよい。

明代になると、科学技術の発展という点では、特に天文数学の分野で顕著であったように、宋代に遠く及ばず停滞状況にあったといえる。ところが、明末になると、ヨーロッパのイエズス会宣教師が到来し、西洋の学問、いわゆる西学を積極的に移植しようとした。イエズス会は、西洋科学史においてはコペルニクスの地動説に反対し、中世のスコラ哲学に執着したことで記憶にとどめられているけれども、東洋においては西洋科学文明の啓蒙家としての大きな役割を演じたのである。

明末清初には、西学の伝入とはほぼ同時発生的に実学思潮の興隆が起こった。それがなければ、たとえ宣教

師達の努力があつても西学の伝来が成し遂げられたとは考えにくい。また、実学思潮の影響の下で、伝統的な科学技術も大きな成果を上げた。宋応星の『天工開物』や李時珍の『本草綱目』はその代表的な例と言えよう。

実学思潮が与えた影響を列举すれば、次の五点である。(一)批判精神(心学への批判)、(二)懷疑精神、(三)「經世致用」思想、(四)実測・実験・実証思想、(五)積極的な西学の受容。

明清時代は、社会の変化という観点からみれば、古い伝統を墨守する中国における近代化の最初の一步であつた、と言えるであらう。しかし残念なことに、決して中国の頑健な社会システムを変えるには至らなかつた。そこに、実学思潮の限界があり、中国の近代化は、さらに第二、第三の段階を経て進められなくてはならなかつたのである。

## 時間解釈と日本の影響

——中国近代における

過去・現在・未来の概念——

マリアンヌ・バスチドール・ブルギエール

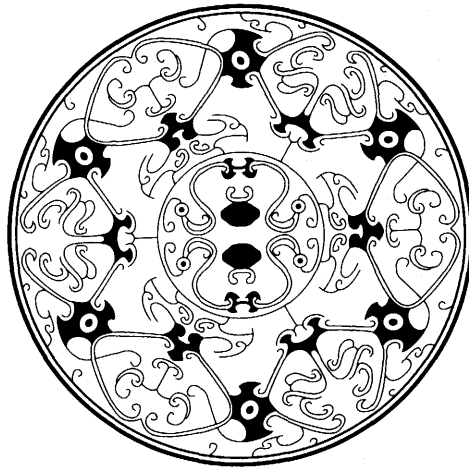
(フランス国立科学研究所研究センター研究員)

時間の概念及び時間の使い方の変化は近代化の過程の中で極めて重要な変化であつた。それは人々が自身の生活を律し、社会の将来を動かして行こうとするやり方に影響を及ぼした。中国における時間解釈の変化はアヘン戦争以前に始まっていたが、中国の政治思想のなかで時間に関する新しいディスコースが形成されるのは、二〇世紀に入ってからである。来日した中国人留学生や旅行者を通じて、日本はこの変化に大きく寄与した。当時、日本はすでにグリニッチ標準時に基づく国際的な時間体系のもとにあつた。産業化は近代化と相俟つて恒常的時間の実施を強要し、義務教育、軍隊、工場、鉄道など中央集権的時間構造が形成されていた。中国には統一的な時間制度がなく、中国人旅行者らは日本の標準化された時間システムに魅了され

た。

標準化された時間の中では、あらゆる時間は均質かつ一様であった。時間は「使用するもの」となり、それは現在の各瞬間においてなされたから、現在が過去より重要になった。中国の伝統的世界観では、現在は過去を完成させるものであり、過去は現在を正当化するものであって、過去は現在に比べて優越していた。中国には「未来」をあらわすはつきりした言葉はなく、あっても相対的なものにすぎなかった。一八八〇年代末以来、日本の歴史家たちは、ヨーロッパ史の原理に従属しない、自らの術語で理解された日本およびアジアの過去に目を向けていた。日本の「東洋史」の出現は中国人の歴史的過去に対する認識の変化に大きな影響を与えたのである。

過去は知的考察の対象となり、未来を規定する力を否定された。一方、現在は自由なイニシアチブに開かれた舞台となり、未来が形作られる場へと変わった。世紀交代期の中国の現状は、多くの青年たちに「差し迫った」感覚を抱かせた。この危機意識は、個人の意志の力を称揚する主意主義の影響（これも日本経由であった）と結びつき、個人の自由な振るまいによって社会を変えることができると信ぜられるようになっていく。その最も顕著なあらわれが「革命」であった。



## 彙報

(一九九九年一月より十二月まで)

### おくりもの

。竹内實名誉教授は、勲三等旭日中綬章を受章(十一月三日付)。

### 訃報

。清水盛光名誉教授(九四歳)は、一月十六日逝去。

### 人のうごき

。谷井陽子(東方部)助手は、辞任の上、(三月三二日付)天理大学講師に就任。  
。濱田麻矢(東方部)助手は、神戸大学文学部講師に昇任(四月一日付)。  
。山本有造(日本部)教授を当研究所長及び附属東洋学文献センター長に併任(四月一日〜八月三二日)。  
。山路勝彦関西学院大学教授は、併任教授(比較文化研究部門、四月一日〜二〇〇〇年三月三二日)。  
。塚本明三重大学文学部助教授は、併任助教授(比較研究部門、四月一日〜

二〇〇〇年三月三二日)。

。竹沢泰子筑波大学助教授は、当研究所助教授(西洋部)に転任(四月一日付)。

。池田巧立教大助教授を、当研究所助教授(東方部)に採用(四月一日付)。

。菊地暁氏を助手(日本部)に採用(四月一日付)。

。稲本泰生(東方部)助手は、奈良国立博物館学芸課に転任(五月一日付)。

。古松崇志氏を助手(東方部)に採用(五月十六日付)。

。桑山正進(東方部)教授を、当研究所長事務取扱及び附属東洋学文献センター長事務取扱(九月一日〜十月三二日)。

。桑山正進(東方部)教授を、当研究所長及び附属東洋学文献センター長に併任(十一月一日〜二〇〇一年十月三二日)。

### 海外での研究活動

。勝村哲也教授(附属東洋学文献センター)は、文部省科学研究費補助金により、平成十一年一月二日大阪発、タマサート大学において日・タイ間の通信回線利用状況の調査ならびに漢字の国際的流通に関する協議を行い、一月六日帰国。

。勝村哲也教授(附属東洋学文献センター)は、文部省科学研究費補助金により、一月十六日大阪発、台湾中央研究院において漢字の国際的利用に関する協議を行い、一月二十日帰国。

。高田時雄教授(東方部)は、平成十年十二月一三日大阪発、フランス高等研究院において敦煌の言語生活に関する研究及び講演を行い、一月二二日帰国。

。小牧幸代助手(日本部)は、委任経理金により、平成十年十二月二四日大阪発、パキスタンジャマアテ・イスラミー組織本部・支部において大衆的イスラーム運動の動向研究および資料収集を行い、二月八日帰国。

。真下裕之助手（東方部）は、一月三十一日大阪発、ラームブル・ラザー図書館においてベルシア語写本調査、ムンシラームマノハルラール（インド）においてインドイスラム史に関する資料収集を行い、二月十五日帰国。

。金文京助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、二月二日大阪発、ソウル大学中国文学科において孝子説話研究についてのレビューを受け、二月二十五日帰国。

。岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、三月四日大阪発、河南省文物考古研究所、焦作市文物工作隊において府城遺跡の発掘調査を行い、三月十八日帰国。

。勝村哲也教授（附属東洋学文献センター）は、文部省科学研究費補助金により、三月九日成田発、ハーバード大学、UCバークレイ校において漢字の国際的利用に関する国際会議に出席し、中国古籍・中国古地図史料の調査を行い、三月十八日帰国。

。東郷俊宏助手（東方部）は、三月十四日大阪発、北京中医药大学、中医研究

院において中国金元期医学書、本草書に関する研究資料収集、崑崙飯店において老中医臨床技術の調査を行い、三月二一日帰国。

。勝村哲也教授（附属東洋学文献センター）は、三月二八日大阪発、台湾中央研究院歴史言語研究所においてデータ交換について打合せならびにデータの実験を行い、三月三十日帰国。

。岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、四月四日大阪発、河南省焦作市文物隊において府城遺跡の調査、中国社会科学院考古研究所において調査結果の検討を行い、四月一八日帰国。

。高田京比子助手（西洋部）は、四月二二日大阪発、ヴェネツィア市内において中世ヴェネツィア及びヴェネツィアの東地中海植民地に関する史料調査を行い、パドヴァ大学において史料調査及び意見交換、クレタ島において中世ヴェネツィアの東地中海植民地（クレタ島）に関する資料調査を行い、五月八日帰国。

。桑山正進教授（東方部）は、五月七日

大阪発、カナダマクマスタ大学においてガンダーラ佛教研究国際集會に出席し、五月十四日帰国。

。岡村秀典助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、五月五日大阪発、河南省焦作市文物隊において府城遺跡の調査、河南省文物考古研究所において調査結果の検討を行い、五月十六日帰国。

。籠谷直人助教授（日本部）は、五月三十一日大阪発、台湾中央研究院近代史研究所において學術講演會参加及び發表、中央図書館台湾分館において資料調査を行い、六月二日帰国。

。勝村哲也教授（附属東洋学文献センター）は、六月一三日大阪発、台湾中央研究院において漢籍電子文献協調委員會に出席し、六月十七日帰国。

。古勝隆一助手（東方部）は、六月十三日大阪発、台湾中央研究院において漢籍電子文献協調委員會に出席し、六月十七日帰国。

。竹沢泰子助教授（西洋部）は、文部省科学研究費補助金により、六月二三日成田発、全米日系博物館において国際

日系研究調査プロジェクト会議に出席、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、カリフォルニア大学バークレー校において人種理論に関する資料収集を行い、七月八日帰国。

。金 文京助教授（東大部）は、七月十五日大阪発、台湾中央研究所において世変と維新・晩明と晚清の文学芸術検討会に出席、論文発表を行い、七月十八日帰国。

。勝村哲也教授（附属東洋学文献センター）は、文部省科学研究費補助金により、八月七日大阪発、デンマーク王立図書館においてグリーンステッド等によって電子化された資料の調査と収集を行い、八月十二日帰国。

。池田 巧助教授（東大部）は、文部省科学研究費補助金により、八月十五日大阪発、北京中国蔵学研究センターにおいてアムド語の調査研究を行い、八月二十九日帰国。

。富谷 至助教授（東大部）は、委任経理金により八月十五日大阪発、スウェーデン国立民族学博物館、デンマーク国立博物館、オランダライデン大学

において研究打ち合わせ及び研究調査を行い、八月二十五日帰国。

。高木博志助教授（日本部）は、八月二十六日大阪発、瀋陽、長春、大連市内において近代国家と民衆統合に関わる現地調査を行い、八月二十九日帰国。

。岡村秀典助教授（東大部）は、文部省科学研究費補助金により、八月十六日大阪発、陝西歴史博物館、西北大学、陝西省考古研究所において江南系玉器の調査、焦作市文物工作隊において府城遺跡出土品の調査、北京大学において調査成果の検討を行い、九月三日帰国。

。荒牧典俊教授（東大部）は、八月二十一日大阪発、ローザンヌ大学において国際佛教学会に出席、ベルリン博物館、ハンブルク大学において資料収集を行い、九月三日帰国。

。勝村哲也教授（附属東洋学文献センター）は、文部省科学研究費補助金により、八月二十八日大阪発、モンゴル科学アカデミー、ナツアグドル博物館において中露蒙に関わる資料収集と情報転送実験を行い、九月四日帰国。

。前川和也教授（西洋部）は、七月二十八日大阪発、大英博物館において大英博物館シユメール行政・経済文書の研究を行い、九月七日帰国。

。富谷 至助教授（東大部）は、文部省科学研究費補助金により、九月三日大阪発、南京博物院、上海博物館において新出文字資料に関する最初情報の収集と調査を行い、九月七日帰国。

。水野直樹助教授（日本部）は、九月三日成田発、ロシア現代史資料研究保管センターにおいて朝鮮関係コミンテルン文書の調査を行い、九月十七日帰国。

。森 時彦教授（東大部）は、九月五日大阪発、中国社会科学院近代史研究所において學術講演、交流及び資料収集を行い、九月十六日帰国。

。小山 哲助教授（西洋部）は、文部省科学研究費補助金により、九月十五日大阪発、ワルシャワ大学歴史学研究所、ワルシャワ国立図書館、チャルトリスキ公家図書館について貴族共和制期ポーランドにおける現地研究者との情報交換及び資料調査を行い、九月二十八日帰国。



。籠谷直人助教授（日本部）は、九月二  
八日大阪発、シンガポール大学におい  
て南洋協会刊行史料の調査及び「日本  
と東南アジアの關係」國際會議に出席  
し、十月三日帰国。

。高木博志助教授（日本部）は、文部省  
科学研究費補助金により、九月二七日  
大阪発、ニューヨーク大学文学科、コ  
ロンビア大学東アジア研究所、プリン  
ストン大学において日米共同研究に関  
する打合せを行い、ハーバード大学ラ  
イシャワー研究所において「一九五〇  
年代の諸問題」をめぐるシンポジウム  
に出席し、十月五日帰国。

。籠谷直人助教授（日本部）は、十月十  
五日大阪発、韓国延世大学國際大学院  
において「アジア通商網と近代日本と  
の關係一八八〇—一九四〇」に関する  
研究、資料収集を行い、十月十八日帰  
国。

。高田時雄教授（東大部）は、十月十八  
日大阪発、台湾中正大学において「言  
語学と漢文佛典について」の講演会に  
出席し、十月二二日帰国。

。勝村哲也教授（附屬東洋学文献セン

ター）は、十月二六日大阪発、The  
National Academy of the Korean  
Language（韓国）において電算処理  
に関する國際ワークショップ出席し、  
十月二九日帰国。

。岡村秀典助教授（東大部）は、文部省  
科学研究費補助金により、十月十九日  
大阪発、山東省博物館、北京大学等  
において遺址、玉器の調査・打ち合わせ  
を行い、十一月四日帰国。

。大浦康介助教授（西洋部）は、十一月  
七日大阪発、北京中国京劇院において  
日仏共同演劇プロジェクトへの参加及  
び京劇研究のための資料収集を行い、  
十一月十一日帰国。

。田中雅一助教授（西洋部）は、文部省  
科学研究費補助金により、十一月九日  
大阪発、シンガポール大学、マカラ国  
立大学においてインド人移民の調査を  
行い、十一月二二日帰国。

。真下裕之助手（東大部）は、文部省科  
学研究費補助金により、十一月二十日  
大阪発、大英図書館、王立アジア協会  
においてチャガタイ・トルコ語、ペル  
シア語文献の諸写本研究を行い、十二

月一日帰国。

。横山俊夫教授（日本部）は、文部省在  
外研究員旅費により、十月六日大阪発、  
ケンブリッジ大学、オックスフォード  
大学において前近代日用百科書の日英  
比較研究に関する資料調査を行い、十  
二月五日帰国。

。森賀一恵助手（東大部）は、十一月三  
十日大阪発、フランス科学研究所、東アジア  
言語研究所において甲骨文発見百周年  
記國際會議において報告を行い、十二  
月四日帰国。

。高嶋 航助手（東大部）は、十一月三  
十日大阪発、北京第一歴史檔案館、南  
京図書館に於いて清代裁判・財政文書  
の閲覧及び収集、上海図書館において  
民国期新聞の閲覧収集を行い、十二月  
十四日帰国。

。大浦康介助教授（西洋部）は、十二月  
九日大阪発、香港大学に於いて「香港  
の中の日本／日本の中の香港」に関す  
る研究集会に出席し、十二月十二日帰  
国。

。田中雅一助教授（西洋部）は、十二月

九日大阪発、香港大学において「香港の中の日本／日本の中の香港」に関する研究集会に出席し、十二月十二日帰国。

。小牧幸代助手（西洋部）は、文部省科学研究費補助金により、十二月十日大阪発、パキスタン国立言語学研究所においてパンジャーブ州における言語とイスラーム化の問題に関する調査、科学アカデミー歴史研究所においてウズベキスタンにおけるイスラーム化の問題に関する調査、ウルドゥー語学研究所に於いてパンジャーブ州における言語とイスラーム化の問題に関する調査、ジャマア・アテ。イスラミイイスラマバード支部においてパキスタンにおけるイスラーム化の問題に関する調査を行い、十二月二十七日帰国。

。勝村哲也教授（附属東洋学文献センター）は、文部省科学研究費補助金により、十二月十六日大阪発、国立国語研究院において朝鮮文献の集成に関する研究打ち合わせと成果とりまとめを行い、十二月十八日帰国。

。高田時雄教授（東方部）は、十二月十

六日大阪発、北京大学歴史系において中西交渉史に関する研究及び講演を行い、十二月三十日帰国。

### 外国人研究員

。Lambert Schmitthausen ハンブルク大学教授  
楞伽經の哲学と環境倫理

期間 一月十八日～四月二三日  
受入教官 荒牧教授

。Asko Parpola ヌルシンキ大学教授  
サーマヴェーダの文献と伝承

（比較社会客員部門）  
受入教官 藤井助教授  
期間 二月一日～十二月二十日

。Antony Martin Best ロンドン大学国際関係史学部専任講師  
一九三〇年代の日英間の相互認識と脅威の本質

（日本学客員部門）  
受入教官 籠谷助教授  
期間 七月一日～

二〇〇〇年四月三十日

### 招聘外国人学者

。Takashi FUJITANI カリフォルニア

大学サンディエゴ校歴史学部準教授  
太平洋戦争における民族的マイノリティ出身兵士の比較研究

受入教官 水野助教授  
期間 一月十二日～三月二五日

。金 慶南 釜山大学校韓国民族文化研究所研究助教

一九三〇～四〇年代における朝鮮の綿紡績工業化と労働力再生産

受入教官 水野助教授  
期間 四月一日～十月三二日

。馬 彪 北京師範大学歴史学部助教  
後漢政治史の研究

受入教官 富谷助教授  
期間 四月一日～

二〇〇〇年三月三一日  
。Kristine DENNIFY カリフォルニア大学ロスアンゼルス校歴史学部博士課程

戦後日本における植民地朝鮮の記憶  
受入教官 水野助教授

期間 四月一日～

二〇〇〇年三月三十一日

。J. Marie CREAMER イリノイ大学人  
類学研究科博士課程

日本女性の海外旅行体験の調査

受入教官 田中助教

期間 七月六日～八月二七日

。O. Franck VENTURE パリ第七大学  
東アジア研究科博士課程

出土資料による殷周史の研究

受入教官 高田教授

期間 七月六日～八月二七日

。張東 翼 慶北大学教師範大学歴史教  
育科教授宋・高麗交渉史料の収集と研  
究

受入教官 富谷助教授

期間 九月一日～

二〇〇〇年八月三十一日

。G. Aurora TESTA イタリア国立東方  
学研究科研究員

唐代洛陽城の考古学的研究

受入教官 桑山教授

期間 九月二十日～

二〇〇〇年九月十九日

。F. Daniel VOEGELI ローザンヌ大学  
文学部博士課程

ヴァードウーラ・シユラウタスートラ

第五章（動物犠牲祭）の研究

受入教官 井狩教授

期間 十一月一日～

二〇〇〇年十月三十一日

。王 才強 国立シンガポール大学建築  
系准教授

唐長安城と日本の都市・建築の研究

受入教官 田中教授

期間 十一月十五日～

二〇〇〇年二月十四日

。李 範文 寧夏社会科学院研究員  
西夏語および中期中国語の研究

受入教官 高田教授

期間 十二月一日～十二月十四日

。鍾 少華 北京社会科学院研究員  
日中百科全書の研究

受入教官 狭間教授

期間 十二月五日～

二〇〇〇年四月二日

### 外国人研究生

。呉 瑞雲

一九五〇年代日本台湾関係に関する研

究

受入教官 籠谷助教授

期間 四月一日～

二〇〇〇年三月三十一日

。Johnson Justin Cale

シヌメール語と経済の歴史

受入教官 前川教授

期間 十月一日～

二〇〇〇年九月三十日

### お客さま

二月十九日 インディラ・ガンディー記

念国立芸術センター所長 Kapila-  
Vatsyayan (井狩、荒牧、藤井が応  
接した。)

七月七日 香港大学人類学科講師

WONG, Dixon 本館大会議室にお  
いて「香港における日本製ポルノグ  
ラフィの受容について」の講演を  
行った。

十月三十日 ナント大学教授 Jean-Luc

STEINMETZ 本館大会議室におい  
て「文学研究と伝記」と題する講演  
を行った。

十一月十八日 フランス国立科学研究セ  
ンター研究員 マリアンヌ・バスチ

## 東洋学文献センター講習会

丹羽正之

ド・ブルギエール開所七〇周年記念  
公開講演会において「時間解釈と日  
本の影響—中国近代における過去・  
現在・未来の概念—」の講演を行っ  
た。

。一九九九年年度漢籍担当職員講習会（漢  
籍電算処理）

第一日（九月二七日）

図書館と情報システム（講演）

大型計算機センター教授

金澤正憲

東洋学文献類目の編集とフォーマッ  
ト（講義）

村田康彦

東洋学文献類目冊子体の作成（講  
義）

大型計算機センター教授

研究者の電子メディア利用（講義）

慶応義塾大学文学部教授

金澤正憲

第二日（九月二八日）

漢字コード—外字の処理—（講義）

大型計算機センター教授

上田修一

同 技術専門職員

電子漢字（ekanj）とその属性（講  
義）

小澤義明

同志社女子大学非常勤講師

第三日（九月二九日）

データベース検索（一）（実習）

情報ネットワークとインターネット  
（講義）

大型計算機センター教授

安岡孝一

データベース検索（二）（実習）

データベースの構築（講義）

大型計算機センター助教授

データベース検索（二）（実習）

データベース検索（一）（実習）

情報ネットワークとインターネット  
（講義）

大型計算機センター教授

金澤正憲

同 技術専門職員

最近のデータベースの動向

大型計算機センター助手

川原 稔

第四日（九月三十日）

データベース検索（二）（実習）

抄本（古文書）の画像データベース  
（講義）

大阪市立大学学術情報センター教  
授

柴山 守

テキストデータベースの流通につい  
て（講義）

国文学研究資料館助教授

— 26 —

伊藤鉄也

データベース検索(三)(実習)

第五日(十月一日)

wwwによる情報サービス(講義)

大型計算機センター助教

沢田篤史

学術情報センター総合目録における

中国書目録(講義)

学術情報センター教授

宮澤 彰

。一九九九年漢籍担当職員講習会(初級)

第一日(十一月八日)

漢籍の話(講演)

大谷大学教授

目録法(講義)

竺沙雅章  
梶浦 晋

実習(一)

第二日(十一月九日)

子部(講義)

東京大学東洋文化研究所教授

丘山 新

実習(二)

第三日(十一月十日)

史部(講義)

富谷 至

実習(三)

第四日(十一月十一日)

経部(講義)

実習(四)

第五日(十一月十二日)

集部(講義)

鹿児島大学法文学部助教

高津 孝

## 閩版十三經注疏

古 勝 隆 一

清朝考証学者が、驚きをもって迎えた日本人の著作といえば、まずは山井鼎『七經孟子考文』を挙げるべきであろう。着想は大胆、手法は堅実、作業は緻密、そして依拠資料は貴重。他に類を見ないこの書物が「海外小邦」において撰述されたという事実は、一流の清儒たちの自負心を傷つけるものであった。同書は、『周易』『尚書』『毛詩』『春秋左傳』『礼記』『論語』『孝經』『孟子』の八書を対象とし、諸本を対校し他書を参照することにより、その経、及び伝統的注解の本文を確定しようともくろむ著作である。

ここに紹介するのは、その『七經孟子考文』の原稿とも呼ぶべき山井氏手校本の閩版十三經注疏である。

閩版十三經注疏（李元陽版・嘉靖版とも）自体は、我が国にも伝本が少なくはなく、しかも所の蔵本は印刷・料紙ともに上乘とは評しがたい本ではあるが、山井氏の自筆批校によって書物としての価値が格段に高

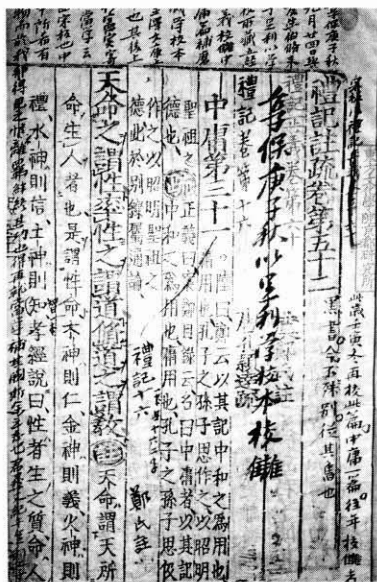
められている。『周易』以下の五経はとりわけよく読まれており、情熱を傾けた貌が如実に知られる。一日一巻程度の速度で注疏の校勘が続けられ、弛まず、しかもほとんど休日がない。国内国外を問わず、これほど周到な句読が施された注疏も、そう多く伝存してはいまい。校記以外にも、足利・江戸での校書生活の日常や交友関係が偲ばれる日記的な記述、さらには筆のすさびなどが随所に見え、興味が尽きない。

山井鼎（字は君彝、号は崑崙、一六九〇—一七二八）は徂徠門下の逸材で、特に書物の校勘を得意とした。徂徠が自著を出版する際にも、その校訂を山井氏の手になねたほどである。しかし、座りどおしで根をつめる校書の仕事は、元来病弱であった彼の命を縮める結果となつたらしく、著書完成の二年後、故郷の紀州にて逝去している。彼の著書が荻生北溪（物観）らによる補訂を経て出版されたのは、死の三年後であった。むろん、自著が中国の学者を驚かせることになることなど、知る由もなかった。

この注疏が本所に収蔵されたのは、昭和九年。狩野直喜の手になる箱書きがある（写真一）。この本には、山井鼎の後嗣、山井璞助の校語も見えるので、その所持とも想像されるが後の流伝は必ずしも明らかでない。

「南葵文庫」の印記が存するところから、江戸の終わり頃から紀州藩が蔵していた可能性もある。山井鼎は西條侯松平頼致の臣であり、『七経孟子考文』の清書本を頼致に献呈した。それが現在、本学附属図書館に収められ、巻首には「紀府分藩京兆家文学 山井鼎謹輯」と。頼致はのち紀州藩主となったので、その縁でこの山井鼎手沢本が紀州藩に収められたものであろうか。

吉川幸次郎はこの山井鼎手校本を「手沢具さに在り、本所校本の冠と称するに足る」と高く評価し、詳細な解題を撰んだ。山井氏の身辺記事を、解題では実に丹念に蒐集している。そこにも録された書人のうち、最も私の関心を引くのは『礼記』中庸篇冒頭のそれである、「享保庚子秋九月廿四日、友生の伯脩と足利に來たり、学校所蔵の五經正義を以て中庸篇を校讐す、……、君彝父 足利学校にて記す」(写真二)。伯脩とは、徂徠門下の同学で君彝の無二の友、根本遜志の字である。東京大学総合図書館には根本手校本『礼記註疏』を蔵し、その中庸篇末にも「享保庚子秋九月廿四日、友人の紀州山君彝と野州足利の学に來たり、上杉憲実奇附する所の宋板正義を以て中庸一篇を校讐す、……、根遜志」と。享保五年晩秋のある日、二人の学徒が足利で校書生活を始めたことを知るのである。



## 無言をめぐつて

横山 俊夫

西暦紀元二千三十年代。人類は自分でつくった強大な力の制御に悪戦苦闘。自滅だけは避けたい、と。そして、からくも二十四十年代をむかえ、煉獄をくぐりぬけたことよと胸をなでおろすのもつかのま、世はすでに無数のタブーでしばられ、対話もせんかたなしの閉塞安定――

この筋書きは変わりうるのか。それは、人間が自分を宇宙のどこに位置づけなおすか、そしてその大きな新秩序を、力ある言葉で語りだせるかどうかにかかっている。

専門家以外には意味不通の記号がインターネットでとびかう現代の様相は、すでに問答無用の無言社会を思わせる。しかしおなじ無言といっても、大型類人猿には、まなざしとしぐさによる秩序の確認と自制ということがある。それは数百万年以上まえに枝分かれしたはずの各種ともにみとめられ、人類も等しくわかちもつはずという。

昨春、現代社会の言葉のうつろいに関心をよせる各氏を募り当班（「安定社会と言語」班）が発足。本学内外から動物学や生態学、芸能や科学表現の研究者も加わっていた。明るい安定社会は可能か。それをささえる媒体としての言語のありようはいかに。この二つの問いをきっかけ、事例研究をかさねている。

各回の報告のまえに『色道大鏡』を右のような関心から輪読。著者藤本箕山は十七世紀日本の遊郭という非武装閉鎖空間の人間模様を二十八品にわけた。我執者がかたる偽りの諸相と、それを無言でうけとめ、郭の安定と賑わいをはかる達人とのとりあわせがおもしろい。

この活動は、一九九九年三月の人文研七〇周年記念国際シンポジウム「人文学の新時代」を直接の契機とし、九七年秋から一年間行った試行的共同研究「言語力の諸相」をひきつぐかたちで始まった。なお背景には、一九八九年から九九九年にかけての、京都ゼミナールハウス主催の京都国際ゼミナール「安定社会の総合研究」があることを、関係各位への謝意とともに付記しておきたい。



## ポルノグラフィ研究

大浦 康 介

「ポルノグラフィ研究」と銘打った研究班を発足させてからもうすぐ一年になる。これはもともと田中雅一さんと「やろうよ」「うんやろう」といったノリで二、三年前から話していたものが、確たる方向性も定めないままとにかく走り出したものである。

ただ僕は僕で（そしておそらく田中さんは田中さんで）期するところがなかったわけではない。僕の場合は直接的には数年前からのサド研究がきっかけだが、それ以上に、人類学の人たちと少しつきあってみたいというのがあった。ソルボンヌでパリ第三大学の比較文学研究グループとCNRSのCRALが共同で推し進めている研究プロジェクトに「文学の人類学」というのがあって、その集まりに僕も何度か出させてもらったが、そこから受けた刺激もあった。

他分野のことは分からないが、文学研究を長くやっているとは知らず知らずのうちに一種の反射神経ができて上がってしまう。コーパスのとりかたや資料の「料

理」のしかたがパターン化する。これを「メチエ」と呼ぶのだろうが、半面では硬直化である。材料が違ってても料理の仕方が同じではやがて飽きがくる。飽きがくるだけならまだいいが、肝心の想像力が枯渇する。

人文研というのは、このように硬直しかけた関節を異分野の人にほぐしてもらうのに恰好の場所である。

「ポルノ研」（あまり省略して呼びたくないが「ポル研」などという人もいる）には幸い文学、人類学以外にも、社会学、美術史、医学史などの専門家に集まってもらった。むしろ関節がほぐれすぎてふにゃふにゃにならないよう気をつけるべきかもしれない。話題が話題である。

たとえばこういうことがある。『セクシュアリティの歴史社会学』を書いた赤川学さんがゲスト発表をしてくれたことだが、彼はオナニーに坎する明治期以降の言説状況を正確に把握するためのデータの網羅性の必要を説いた。当然である。しかし文学研究者ならそこは少数の「特権的」あるいは「兆候的」テキストの分析で済ませてしまおうところだろう。目指すところが違うといえはそれまでだが、そうとばかりもいえない（文学研究者のなかにも「歴史家」はいる）。この反応の違いの理由はいろいろあるだろうが、ひとつは文学研究者が「怠けもの」だからである。

意味深い、味わい深いテキストだけを読みたいからでもある。

こうして異分野の人との交流は、自身の「偏向」に開眼する契機でもある。もともと僕がここで語っているのは、文学研究者一般ではなく、たんに僕個人のことなのかもしれないが。

## 宴の後、言葉の森

宇城輝人

共同研究「一七八九年人権宣言成立過程の研究」は本年三月をもって終了する。その成果は遠からず資料集にまとめられるだろう。だが個人的感慨としてはこの研究会は終わらない。

そう感じるのは、憲法問題に取りかかるため「人間と市民の権利の宣言」が一七八九年八月二七日に「さしあたって」中断され、未完のまま宙吊りされているからかもしれない。あるいは研究会が進むうちに、夢

想がちな私はいつのころからか、抽象原理の検討に倦み疲れた議員たちが退出した後の議場に乱雑に残された言葉を拾い集めているような、そんな気がしていたからかもしれない。ラボーさんお疲れさま、シエースさんお帰りで……

それはたんに私の語学力が貧弱だからなのだが、外国語の意味は遠い。人権宣言にかんする膨大な演説と草案は、議員たちが去っていった後では、富永班長を初めとする班員のみならず一緒に議論して日本語に移し換えていくしかなかった。いや、ことはそれほどにも単純ではなかった。

遠い言葉で表現されていたのは、われわれの近代的政治感覚そのものが生みだされるプロセスであって、ゆえに、あらゆる始まりにかならず含まれる混乱や齟齬、うまく結実しなかった萌芽、失われた可能性に満ちていた。市民、自由、平等、権利、義務、幸福……われわれに親しい問題でもあるだけに、かえって理路が見えにくい。右も左もないとは、このことである。

議員たちがいなくなった後の議場は、しかしそれほど寂しい空間でもなかった。言葉を拾い集める班員たちも劣らず思考をめぐらせ言葉を交わし、ときに国民議会さながら紛糾し、ときに哄笑が弾けもしたのでから。

(日本学術振興会特別研究員)

## 中国共産党史の今日

江 田 憲 治

「共産党史の研究者なんて、ワシントン条約の保護を受けなきゃ、そのうち絶滅してしまうよ」——とは、筆者がよく言う仲間内の冗談であるが、たしかに筆者の学生時分に比べれば、日本の中国現代史研究における共産党史の比重は随分軽くなった。それだけ共産党（とりわけ毛沢東）の存在が相対化され、現代史に対するアプローチが多様になった訳で、共産党史を「中華民国史」の政党史の一部ととらえる見解も有力になっている。

だが、共産党史が民国史の一部に解消しきれないことも確かである。共産党は、中華人民共和国を作り上げた政党であり、共産党史なる視座は民国史・共和国史を通して有効なはずであるからだ。また九〇年代以降、中国における大量の党史資料の出版（中国の研究者によれば九割の文献が公表されているという）やロシアにおけるコミンテルン資料の公刊は、従来の研究環境を一変させている。

こうした研究状況こそが本研究班の出発点である。研究班では初期中国共産党に対する日本の影響、日本マルクス主義者の中国での活動、日中戦争期の中国共産主義者の抵抗等、「中国共産主義と日本」の関係を中心に報告・討議が重ねられ、共産党史を貫く、コミンテルンの絶大な影響力と、中国党独自の政策提起という相反する二つの側面が強く浮かび上がっている。

（京都産業大学助教授）

## 「訳経僧伝」研究班のこと

真 下 裕 之

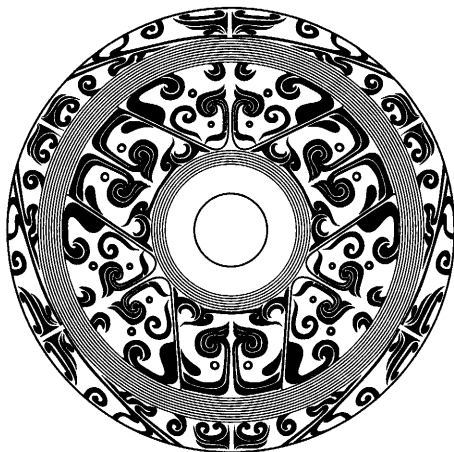
この研究班の作業は、訳経僧たちの伝記（漢文）の会説である。ユーラシア東半の海陸をめぐる人的・知的交流を、立体的に組み上げるための資料として、翻訳・注釈の作成を目指している。宗教、歴史のみならず、考古、言語、美術、文学などの専門家の参加を得て、できる限り多面的な検討とともに読み進めている。

こういうわけで、毎回の担当者が用意する翻訳案・訳注にも、それぞれの個性が反映していたいへんおもしろい。会読において交わされる話題はときに、環インド洋世界の海民ネットワークや、中世イスラームの君主の鑑文学にまでおよぶ。

また、班員は文献の専門家ばかりではないので、折に触れ、班員の現地調査の報告がスライドを交えて行われる。これは、文献読みの研究班としては、他にない特徴であろう。

文献読みの会はそれ自体、地味な作業の積み重ねだが、その目標である翻訳・注釈は、班員の個人研究に還元されるだけでなく、基礎資料としてさらに広く利用されることになる。つまり、素材自体の提示は、おのずと、基礎研究の拠点としての研究班の自己主張たりにえると思うのである。

この研究班は最終年度を迎えた。「訳経僧伝」の日本語訳および注釈の作成が、上首尾に完結することを期待する。なお、この班に先立つ班研究の成果として『悟空行記』訳・注が出版の段階に入りつつあり、同じく『法顕伝』訳・注も、整理が進行中であることも付け加えておく。



## 所のうち・そと

### 新文房四宝の悩みと楽しみ

岩 井 茂 樹

文房四宝とまではいかなくとも、かつては筆記具や紙へのこだわり、楽しみもあった。ところが今や、フロッピーや電子メールで入稿すべし、の時代。キーボード、CPU、ディスプレイ、ソフトウェアの新文房四宝が、筆記具さえ駆逐する勢いである。この時勢に、わが『東方学報』をはじめ、守旧派雑誌は旧漢字なるものを要求する。一方、普通の社会では、旧漢字はお断り。悩ましいことに、われわれの伝達手段であるJIS漢字コードは、新旧の漢字や俗字を併存させている。しかも中途半端に。資料や草稿を入力する段階では、これらの別にかまう筈はないので、おのずと新旧俗が混在する。

十数年前、パスカルというしゃれた名前の言語をおぼえた私は、テキストファイル中の新旧漢字のすべてを一気に置換統一するソフトを作った。sed などスクリプト言語でも、同様の処理は簡単に書けるが、ささ

やかな工夫をこらした自家製プログラムの方が速かった。やがてウィンドウズに移行すると、新旧の置換統一のためにDosのプログラムを起動し、ファイルを処理させるのは面倒である。四年ほど前、プログラム機能をもつエディタを買い、C言語風のマクロ言語をかじってプログラムを書き直した。かくて、文章を書くエディタの環境のなかで、範囲を指定して新旧漢字を簡単に統一できるようになった。

原稿や資料の入力はエディタが快適だが、注をつけ体裁を整える段になるとワープロが便利である。ワープロでの作業にとりかかる前に、新旧漢字の置換統一を済ませておいても、さらに文章を加えることが多い。新旧統一機能はワープロにも欲しい。しかし、このワープロのマクロ言語は、オブジェクト指向という新種であるうえに、マニユアルが附属しない。別に購入すると高価である。こうして尻込みをしていたのであるが、今年の正月、進展しない論文の気分転換にでもと、マニユアルなしでプログラムに取りかかった。

処理対象として選択した範囲をRangeという型のオブジェクト変数で受け、そのRangeオブジェクトの要素である個々の文字を走査して置換するという単純な設計である。ところが、走査すべき文字を受ける変数の型を間違えたようだ。CharやWChar(文字

型) もだめ、String (文字列) もだめ、Word (2 バイト汎用型) もだめ、どの型の変数をつかってでも文字を受け取れず、エラーになる。万策尽きたところで、解説の画面に「文字は Range オブジェクトです」という一句を発見した。複数の文字や文章の段落からなる選択範囲はすでに Range という型のオブジェクトである。さらに、その中の要素である個々の文字も Range という型のオブジェクトだという。仰天した。Range という型が二重に定義され、しかも入れ子になるとは。パスカルやCなどの構造化言語では許されない。ところが、ここでは文字を受け取る変数を Range オブジェクトとして宣言すると、エラーは解消しプログラムは動いた。

オブジェクト指向とはこういうものか。あちこち頭をぶつけながら体験し書いてみないと、事からの理解は難しい。新文房四宝も、歴史の研究もこの点では同じかもしれない。

## 古本屋と私

落合弘樹

私は入所した年の開所記念パーティーで新人挨拶を行った際、「古本屋さんで御名前を存じあげている高名な方々を前にし……」などと口走り、名誉所員の方々にとんだ不調法を働いた。宴たけなわで誰も聞いていないだろうと思っていたが、後の祭りだった。一瞬の沈黙のち会場じゅうから笑われた。普通なら舌禍事件として一巻の終わりだったはずだ。寛容にも今日まで禄を食むことが許されているが、開所記念日を迎えると、こんなことを言わないようにと「新人教育」をする人が現れるので、いつも冷や汗を流す。

研究者と古書店は切っても切れない関係にある。私は東京に住んでいた当時、神田神保町の古書店街に毎週通った。一日歩き回ると必ず何らかの発見はある。自然に、ある程度は古書の値段がわかるようになる。そんな次第で、「あの先生の御本は随分と高かったな」などと考えているうち、冒頭の無礼な発言をしてしまった。

京都には神田のようなまとまった古書店街がないの

で、通りがけに古書店に立ち寄ることが多いが、ひとたび顔を覚えていただければ東京より親切な店主が多い。土地柄から和本など珍しい書籍も豊富で、著名な学者の旧蔵書が店頭に並ぶこともある。先日、ある史料集を格安で購入した。赤鉛筆の書き込みが入っているので値引きされていたが、私の研究主題の先行研究者で、人文研助手の大先輩でもあった方の遺品だった。残念ながら生前にお目にかかることができなかったが、書き込みからは多くのことを学ばせていただいている。

## ピユフとギャプ

北 垣 徹

ソルボンヌ広場のオーギュスト・コント像は今、ピユフとギャプに挟まれて立っている。ピユフPUFとはフランス大学出版局 (Presses universitaires de France)。クセジュ文庫で知られ、学術書を多数出版するこの伝統的な書店は、経営難から昨年倒産の噂が出回った。土壇場になって大手の出版社フラマリオン

の援助により、何とか一命を取り留めることとなったが、ポケット版専門の別の小売店は閉めざるを得なくなったようだ。ギャプGAPの方は若者・子供向けの衣服を扱い、今や日本を含め世界中に展開しようとしているアメリカ資本の企業。パリでもここ数年のあいだに、マクドナルドほどではないものの、町中でかなりの数の店舗を見かけるようになった。ピユフとギャプ、コントに倣ってこの二つのあいだに立つと、アメリカにたいして現在のフランスの置かれている場所が垣間見えるような気がする。

旧共産圏の崩壊後、完全にグローバル化しつつある経済。その中心にあつて、情報・ハイテク産業に支えられて一〇年来の景気拡大を続けるアメリカ。他方で、一〇パーセントを越える失業率に長らく悩まされてきたところ、近年にわかに最悪の事態からは脱しつつあるフランス。こうした状況のなかで、市場開放・自由競争の原理を唱えるリベラリズムの潮流にどう抗うかは、この国でも大きな議論をよぶ問題だ。とりわけ昨年末にシアトルで開かれた世界貿易機関——WTO、仏語ではOMCと略される——の会議を機に、議論は多方面で広がった。その詳細は別として、一躍表舞台に出てきた一人に、ジョゼ・ボヴェエなる農民団体のリーダーがいる。日焼けした顔に口ひげ、彼はすでに

この会議以前に「ロックフォールチーズを守れ」という標語のもと、マクドナルド店を襲撃して逮捕されるという事件で名を馳せていた。こうした単純すぎるまでのパフォーマンスを引っさげてシアトルに乗り込み、他の非政府組織の市民団体と連帯しつつデモを行うボヴェ。そして会議は結局、新たなラウンドの合意に達することなく失敗に終わった。

とはいえ、ミッテラン政権来の国営企業をあらかた民営化してきたフランスにとって、ごく素朴にリベラリズムに対抗するのはもちろん困難だ。反米に関して、文化的には二〇世紀初頭から、軍事的にはドゴール以来存在する紋切り型を振りかざしても、たんなる反動に過ぎないだろう。来るべき世紀に向けて、課題は多い。しかしとりあえずのところ、ピュフがつぶれなくてよかったと、私を含め少なからぬ者が安堵しているに違いない。

## 情報の行方

高 嶋 航

一九九九年一月下旬、人文科学研究所の主催で国際シンポジウムが開かれた。年に三回もスーツを着ることのない僕にとって、前夜の歓迎会をあわせると計五日、毎日革靴を履いて家をでることはとりわけ苦痛であった。

準備は一年以上も前から始まり、僕は事務担当としてこのプロジェクトに関わることになった。はじめは仕事も少なくのんきに構えていたのだが、論文が送られてくるようになると俄然慌しさを増した。なにせわからないことばかり。いろいろな頭をひねって周到に準備をしたつもりでも、問題はどこからともなく生まれてくる。最近ではEメールの普及が進み、意識の上ではもちろんのこと、時間や費用の面においても国の内外の境界はなくなりつつある。おかげで仕事の効率はある分と上がったはずである。しかしいいことばかりではない。「気楽」さから、ついついやり取りが頻繁になってしまふのだ。未確定の情報に気をもみ、振り回されることがしばしばであった。手紙や電話と違って、



情報量が増えた分、個々の情報の重みや確かさが減っているような気がする。いくら技術が進歩しても人間の苦勞は変わらない。

二〇〇〇年の正月、僕はタイのとある半島でクライミングに興じていた。外部の情報から全く遮断された状態で一日ほど過ごしたあと日本に帰って来て、二〇〇〇年問題が何事もなく終わったことを知った。この間、日本では、多くの人たちが二〇〇〇年問題の影に怯えながら過ごしていたのだと思うと、少し愉快な気分になった。帰ってきたその足で研究室に向かい、パソコンのスイッチを入れる。起動しない。まさか。再起動してみる。こんどは起動した。すぐにメールを開く。何十件もメールがたまっていた。メールを貪るように読みながら、ふと気づいた。ついさっきまで情報に振り回される人たちを鼻で笑っていたくせに、いま僕はなんて情報に飢えているんだろう、と。情報から隔絶された南の島ならともかく、情報化社会の只中にあつて情報から逃れることはできない。そうであるからにはこれからもうまく情報とつきあつていかねばならない。

## もうひとつのシュタイン肖像画

瀧井 一博

昨年十月、『ドイツ国家学と明治国制——シュタイン国家学の軌跡——』（ミネルヴァ書房）と題する書物を上梓することができた。顧みれば、この本はいくつもの幸運な出会い——資料と人との——の所産という側面が大いにある。そのひとつとして、逆説的ではあるが、ひとつの失敗譚を開陳しておこう。

すでに最終のゲラを出版社に手渡していたある日、書店で何気なく手にとった雑誌をバラバラとめくっていたところ、一枚の写真が目飛び込んできた。それは明治三十三年十月一日に伊藤博文や山県有朋らの参列のもと挙行された、「スタイン翁追吊会」の写真である。掲載誌は小学館発行の国際政治情報誌『SAP IO』で、ジャーナリストの櫻井よしこ氏が日本の憲法問題について記した連載記事のなかに、深い意味もなく載っていたのである。

この写真自体は別に未知のものではない。清水伸『明治憲法制定史』上巻（原書房、昭和四六年）にもすでに掲載されているものである。画家であったシュ

タインの長子が描いた彼の肖像を背に、伊藤をはじめ、伊東巳代治、谷干城といった面々がおさまっている。だが一驚したのは、写真の鮮明度である。清水氏の著書に掲げられている写真に比して、『SAPIO』誌のものは格段に写りがいい。この写真の拙著への転載を希望していた私は、早速『SAPIO』編集部で電話で問い合わせ、それが毎日新聞社提供のものであることを知ると、今度はそちらへ件の写真の利用を申請し、土壇場で差し替えることができた。こうして拙著には、これまで学界で知られていた「スタイン翁追吊会」の写真よりも、数段良質なものを掲載することができたわけである。出来上がった拙著を手にしたとき、参列者の面立ちがくっきりとうかがえるようになった写真を眺めながら、それとの運命的な出会いに一人感慨にふけた。

ただ、この僥倖の一方で困ったことも生じた。第一に、写真の典拠が印刷の段階で修正されず、これが毎日新聞社から借用したものであることが明記されなかったことである。この点は出版社の編集ミスとして陳謝したが、もうひとつの過ちは自らの考証についてのものである。既述のようにこの写真のなかには、遺影としてシュタインの長男の筆になるシュタイン肖像画が写っている。長男作の肖像画はドイツにも一点残さ

れており、私は追弔会で用いられた遺影もこれと同じものだろうと勝手に思いこんでいた。拙著のなかでも、そのドイツにある絵を掲げて、そのように解説してしまっている（九〇十頁）。だがよく見てみると、両者は似ているが、顔つきが微妙に違っているようでもある。息子の筆になるシュタインの肖像画はもうひとつ存在するのもかもしれない。写真が鮮明になり、かえってこちらの早とちりが露見することになってしまったようだ。拙著を手にする度に、汗顔しながら、そのもうひとつのシュタイン肖像画に思いを馳せている。

## 一・一七が今伝えるもの

竹沢泰子

阪神淡路大震災から五年を迎える前日の日曜、私は火災による犠牲者の最も多かった長田の鷹取からモニユメントのある三宮まで歩くという神戸愛（人）ウォークに参加し、私の生まれ育った街を違う目で見てみた。長田には定住外国人の調査で度々訪れている。

三宮はいつも通るところだ。けれど全行程を歩いて再々確認したこと、それは「復興」をめぐる東の三宮と西の長田のあまりにも大きな落差だった。鷹取を歩き始めて眼前の風景に異様を感じた。それは新築の家の垂直・水平の線と古い家の傾斜線、舗装された道路の平面とひび割れた道の凹凸の混在だった。

国道沿いの入り口から入った菅原市場は、プレハブばかりでほんの数メートル。全部シャッターを降ろしたままだ。震災後テレビで元氣な立ち直りを見せたかにみえた菅原市場も、今は転業廃業、残る五店がスーパーを同じ場所につくるという。そしてその出口から先に広がっていたのは、あたり一面の更地だった。ポツンポツンと小さな新築の家と基礎工事。人が戻っていないのだ、ここには。

長田の街には、焼き肉屋、ケミカルシューズの小さな作業場、三菱や川崎重工の下請けの鉄工所が多い。そんな街のなかに朝鮮学校もある。コリアンやベトナム人、被差別部落といったマイノリティの多い街。震災直後から次々に長田では新たな「外国人」支援のNGOや多言語放送のFMなどが生まれたが、長田は神戸の街の「多文化共生」の最先端の実践場となってきた。震災の折の国籍の壁を越えて見られた住民同士の助け合いは、国が超過滞在の外国人犠牲者の家族への

弔慰金を拒むなど差別を設ける一方、外国人も同じ「地域住民」との意識を強めた。そして、住民、NGO、県・市の自治体と下から押し上げる形で援助し、隣人の外国人に対する大きな意識変革をもたらしたと言っても過言ではないだろう。そんな「共生」が、ユートピア化はできないにしても、日常の実践となっていることを、街を歩きながらも感じた。

小雨の中歩く長田の行程のあちこちで、自治会の人々がテントをはって温かい飲み物の差入れをくれる。トイレを開放してくれる。土地を出し合って広げられた道。話し合いから出来た新しい集合住宅。譲った残りの小さな土地に私財で建てられた母子像と泉。震災の後に生まれたものはそこにもあった。

神戸の人は不思議なほど前向きだ。あの日以来、国内外を問わず、災害に神戸のボランティアがいかに活躍してきたかは我々も知るところだ。語られる美しすぎる言葉に半ば懐疑的だった私も、五年の歳月を振り返るさまざまな機会に接して、前向きな人達の声がもうでない人達の声をかき消すほど強く、一歩一歩地獄からはい上がってきた後にこそ見せるやさしさなのだと悟った。人々のきずな、思いやり、助け合い……彼ら・彼女らがいう、一・一七から明日へと伝えたいもの、世界へと伝えたいものを確かに垣間見た気がする。

〈人文科学研究奨励賞〉

## 親碗を叩く

岡本 稻丸

絵巻物や風俗図の隅に、当時の障害者の生活が窺えますが、外見に現われない聴覚障害者を探すのは難儀です。その点江戸時代の大部な百科事典『和漢三才図会』巻十「人倫の用」(一七二三)に図版入りで各種の障害者が紹介されます。ろうあ者「瘖瘂」は碗を叩いて門付する乞食姿。百年後一茶の「時雨れるや親碗叩く啞乞食」(文政二年句帖、典拠本は「親碗」)もそのままで、近世ろうあ者の姿が偲ばれます。

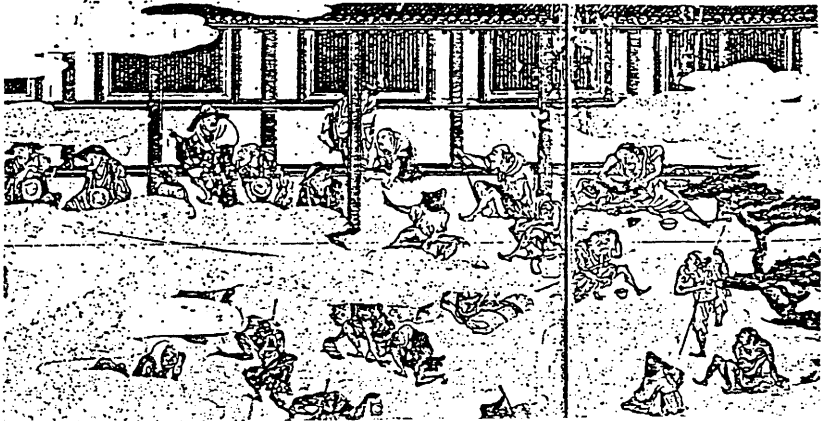
ところで聖書もそうですが、法華経も障害者には残念な資料です。第三章に当る「譬喩品」に「この経を謗るが故に罪を獲ることかくの如し」とし、要約するのも大変ですが、死後は阿鼻地獄から墮落、流転、地獄を出れば畜生に堕ちていじめ殺され、蟒に生まれ変わると小虫に咬られて死ぬ。人に生まれても、瞽、背僂、盲、「生まれながら軋ち聲・瘂にして諸根(感覚や意識)を具せず」等、障害は不信心の応報と口を極めて説かれます(岩波文庫『法華経』上)。

水子を免れた障害者は、村の農作業や巷の徒弟として共同体に養われて働きましたが、仏様に見離され、飢饉等に徒食を責められて、脱落の他ありませんでした。薬も無かった昔、障害は他人事でなく、誰しも安心立命に仏の名号を唱えた時代です。ことばの不自由なろうあ者は鉦や碗の音色に、自らは掌の振動に信仰の証をこめて、社会に自己の承認を求め、人々はそこに施しの機縁を得て、他の障害者ともども当時の秩序があつたといえましょう。

そのような乞食仲間の命の保障となる心の交流、施行の情報、乞場の協定、他の障害者仲間や施主との交渉等に、手話や通訳は必需で古代にも遡りましょう。精査するうち国宝豊国祭礼図屏風(一六〇四)の施餓鬼部分に、手話シーンとみてよい情景を発見できました(次頁図版参照)。



「瘖瘂」『和漢三才図会』  
巻十「人倫之用」1713



手話の情景（推定）国宝「豊国臨時祭礼凶屏風」（徳川黎明会蔵）慶長9年（1604）秀吉七回忌の施餓鬼部分 指に視線を合す人々。手話とみて今日流に解説すれば“明日行く”でしょう。

ウントの説から手話の成立を聾学校とみるのが通説のようですが、以上、拙著の前提とした私の説を記しました。手短で恐縮ですが、何かの御参考になれば幸いです。（二〇〇〇、一、一九記）

〔岡本稲丸氏は、『近代盲聾教育の成立と発展 古河太四郎の生涯から』（日本放送出版協会、一九九七年）の著者〕

書いたもの一覧 一九九九年一月～十二月 (氏名五十音順) ●は単行本

井 狩 彌 介

Y. Ikari, A Survey of the New Manuscripts of the Vadhūa School—MSS. of K1 and K4—, ZINBUN (Journal of Institute for Research in Humanities) 33, 1998, May 1999, pp. 1-30. 五月

池 田 巧

西夏の末裔をたずねて (上) しにか 十巻一号 一月  
西夏の末裔をたずねて (下) しにか 十巻二号 二月

●コンピュータで中国語 Win & Mac (共著)

しにか別冊 五月

●世界のことば100語辞典 アジア編 (共著) 三省堂 六月  
インターネットで中国語

中国語をモノにするためのカタログ アルク 十月  
活きていた西夏語—ムニャ《木雅》語の再発見と存亡—

東洋学と音声記号 ことばと社会 第二号 十一月  
人文学と情報処理 第二四号 十一月

井 波 陵 一

啓蒙の行方—梁啓超の評価について— 狭間直樹編『共  
同研究 梁啓超—西洋近代思想受容と明治日本—』

みすず書房 十一月

岩 井 茂 樹

蕭崇業・謝杰撰『使琉球録』解題 夫馬進編『増訂 使琉球  
録解題及び研究』 榕樹書林 九月  
徐葆光撰『中山伝信録』解題 夫馬進編『増訂 使琉球録解  
題及び研究』 榕樹書林 九月

上 野 成 利

P・ド・マン「美学イデオロギー」(八)——ヘーゲルの『美  
学』における記号と象徴」(翻訳) 批評空間 Ⅱ—二〇号 一月

P・ド・マン「美学イデオロギー」(最終回)——ヘーゲルの  
『美学』における記号と象徴「承前」他」(翻訳) 批評空間 Ⅱ—二三号 七月

〈私的所有〉のポリティクス (学会セッション総括) 社会思想史研究 一三三号 九月

宇 佐 美 齊

文学と悪戯 読売新聞(夕刊) 三月二十四日  
特別な一篇 現代詩手帖 思潮社 四月号  
O chansons, ô saisons: deux traductions japonaises de  
Bonheur d'Arthur Rimbaud, Daruma (Revue d'études  
japonaises), Numéro 5, Printemps 1999.

座談会・近代文学における「私」の系譜（高野公彦・坪内稔典両氏と共に） 短歌の私、日本の私（『短歌と日本人』第五巻） 岩波書店 五月

夕陽と近代日本の抒情 別冊太陽「日本のこころ」一〇六 平凡社 七月

近代詩の中の恋愛——立原道造に照し合せて—— 中原中也の会会報 第六号 七月

ルナールと中原中也

中原中也研究 第四号 中原中也記念館 八月

黄金と遍歴——辻征夫著『ぼくたちの（祖板のような）拳銃』—— 新潮 新潮社 十月

書評・清岡卓行著『マロニエの花が言った』 東京・中日新聞 十月三日

ランボー・流星の輝き 週刊朝日百科「世界の文学」十七 朝日新聞社 十一月

アポリネール・心の操縦士 同右 十一月

六〇号の驚異 現代文学 第六〇号 十二月

京都の詩人建築家 立原道造記念館館報 第十二号 十二月

大浦康介 ブルーストと漫画『ブルースト全集・別巻・ブルースト研究／年譜』月報 筑摩書房 四月

La fiction, aujourd'hui, *F Journal*, vol. 00, Institut franco-japonais du Kansai (フィクションの現在) *F Journal*,

岡村秀典

●故宮博物院十三 玉器（共著） 日本放送出版協会 二月  
龍山文化後期における玉器のひろがり 史林 第八二卷第二号 三月

漢帝国の世界戦略と武器輸出『人類にとって戦いとは1』 東洋書林 三月

●中国古代王朝形成期における畜産と動物犠牲の研究

文部省科研費成果報告書 三月

漢帝国の軍事『よみがえる漢王朝』 読売新聞社 四月

●三角縁神獸鏡の時代 吉川弘文館 五月

文明起源の考古学 しにか 第一〇巻第九号 八月

中国古代王権と祭祀 考古学研究 第四六巻第二号 九月

落合弘樹 一九九八年の歴史学界——回顧と展望—— 近現代二史学雑誌 第一〇八編第五号 五月

●秩禄処分——明治維新と武士のリストラ—— 中央公論新社 十二月

籠谷直人

戦間期アジア通商網の歴史的意義 日本孫文研究会・神戸華僑華人研究会『孫文と華僑』 汲古書院 三月

戦前期日本人商社によるインド棉花の奥地買付活動——東洋

棉花ボンベイ支店を事例にして――

人文学報 第八二号 三月

東洋棉花ボンベイ支店のインド棉花直買活動 杉山伸也、リ  
ンダ・グローブ編『近代アジアの流通ネットワーク』

創文社 六月

一九三〇年代の華僑通商網と日本『岩波講座世界歴史 十九  
移動と移民――地域を結ぶダイナミズム』

岩波書店 八月

『東洋紡績』ほか二〇項目『岩波 日本史辞典』

岩波書店 九月

菊地 暁

民俗文化財の誕生・祝宮静と一九七五年文化財保護法改正を  
めぐって 歴史学研究 第七二六号 八月

木島 史雄

『經典釈文』の著述構想とその変容の構図

東方学報 京都 七一冊 三月

久米島の城址で表面採集された陶磁器片調査整理表（共編）

文部省科学研究費「久米島における東アジア諸文化の媒介  
事象に関する総合研究」報告書 三月

中国古典籍のブックデザイン

静修（京都大学附属図書館報） 三六卷一号 六月

北垣 徹

エスピナス、ワイエ、ブルジョワ、ル・ボン、レヴィーブリ  
ュル『フランス哲学・思想事典』

海外文献紹介・M. Gaucher: L'inconscient cérébral

精神医学史研究 vol. 2 三月

金 文京

●水戸黄門漫遊考

新人物往来社 一月

中国目録学史上における子部の意義

斯道文庫論叢 三三三号 二月

二十四孝について 徳島大学国語国文学 十二号 三月

香港の文学『もつと知りたい香港――第二版』

弘文堂 五月

書評・陳字霖著『劉伯温與哪吒城――北京建城的伝説』

東洋史研究 五八卷一号 六月

●射鵬英雄伝一―五（翻訳）

外国の橋（現代のことば） 徳間書店 六月―十二月

昭南所見（翻訳）井伏鱒二全集・別巻一 筑摩書房 九月

書評・韋旭昇著 豊島健二等訳『中国古典文学と朝鮮』

しにか 十卷十号 十月

国際救難隊（現代のことば）

明代の出版と書――『唐詩画譜』のことなど『中国書論体  
系』十卷月報 京都新聞夕刊 十月

系』十卷月報

廣東木魚書與金蘭會 嶺南學報（香港）新第一期 十月

『好迷伝』と佐藤春夫そしてゲーテ『定本佐藤春夫全集』



三二卷月報

君が代(現代のことば)

京都新聞夕刊 十二月

海外手帳(香港) 十四—十七 共同通信

### 桑山正進

中央アジア考古学の発達 竺沙雅章監修・間野英二編『アジア

アの歴史と文化』八 同朋舎出版 四月

大唐西域記のなぞ 歴史と旅 十二月号 秋田書店 十月

### 小林博行

●食の思想——安藤昌益

以文社 十一月

### 小牧幸代

「アヨーディヤー症候群」という病 木畑洋一他編『(南)か

ら見た世界06 グローバリゼーション下の苦闘』

大月書店 七月

伝統衣装「ブルカ」に見る現代女性事情『ワールド・カルチ

ヤーガイド 九 インド』トラベルジャーナル 十月

### 小南一郎

七夕の儀礼と物語り——水の機能の両義性を中心にして

アジア歴史文化研究所報 第十八号 九八年十二月

楚辞天問篇の整理 東方学報(京都) 第七一冊 三月

史の起源とその職能 東方学 第九八冊 六月

書評・山田利明『六朝道教儀礼の研究』

東方宗教 第九四号 十月

### 小山哲

ヨーロッパのなかのポーランド 近藤和彦編『西洋世界の歴史』

山川出版社 九月

### 阪上孝

●近代的統治の誕生

ルソーにおける市民社会と国家

岩波書店 一月

聖学院大学総合研究所紀要 十五号 三月

### 佐々木克

幕末長州藩の攘夷騒動、東京遷都、西南戦争、自由民権運動、

鹿鳴館とその時代 NHK教育セミナー『歴史でみる日

本』

明治維新と戊辰戦争 戊辰戦争一三〇周年記念誌 十一月

### 高木博志

桜とナシヨナリズム——日清戦争以後のソメイヨシノの植樹

西川長夫他編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』

柏書房 二月

国民文化の形成『日本二〇世紀』 小学館 二月

文化財の近代 週刊朝日百科日本の国宝 一一〇

朝日新聞社 四月

日本近代の文化財保護行政と美術史の成立 東京国立文化財

研究所編『語る現在、語られる過去——日本の美術史学一

〇〇年——』

平凡社 五月

「仁徳天皇陵」を世界遺産に！ 歴史学研究 七二五 七月

畝傍山・神武天皇陵・橿原神宮——三位一体の神武天皇「聖

蹟」is 八二

ポラ文化研究所 九月

国際観光と札幌観光協会の成立——日中戦争前夜の観光ブー

ム 田中彰編『近代日本の内と外』 吉川弘文館 十一月

高 田 京比子

十三世紀前半におけるヴェネツィア都市法の変遷とその社会

的背景 西洋史学 一九二号 三月

クレタ島、いまむかし 地中海学会月報 二二三 十月

高 田 時 雄

●西域行記索引叢刊I 大唐西域記

松香堂 二月

現代における漢字の新要素 東洋文化 第七十九号 三月

回鶻文《慈恩傳》中的漢語詞彙和河西方言——兼論回鶻字音的

歴史變遷「敦煌文藪」(上) 臺北新文豐出版公司 四月

上大人 文學 第十卷第三號 七月

フィロロジーと共同研究 學術月報 五二一八 八月

北京敦煌寫卷中所包含的藏文文獻「吳其昱先生八秩華誕敦煌

學特刊」

葡日辭書序文「葡日辭書」 臨川書店 十一月

瀧 井 一 博

●ドイツ国家学と明治国制——シュタイン国家学の軌跡——

ミネルヴァ書房 十月

竹 沢 泰 子

「人種」——生物学的概念から排他的世界観へ

民族学研究(日本民族学会編) 六三卷四号 三月

The Great Kobe Earthquake and Foreign Residents: Multi-

cultural Coexistence in the New Concept of Local Com-

munity 駒井洋編『新来外国人の行政需要と自治体の国

際化施策との関連に関する研究』平成八〜十年度科学研究

究費補助金(基盤研究(B)(2)) 研究成果報告書 三月

Racial Boundaries and Stereotypes: An Analysis of Amer-

ican Advertising, *The Japanese Journal of American*

*Studies* (アメリカ学会編) 十号 六月

アメリカ合衆国におけるアジアとヨーロッパ——アジア移民

とヨーロッパ系アメリカ人の遭遇と葛藤——『岩波講座

世界歴史』二三三卷 岩波書店 十一月

日本町など三項目『日本民俗大辞典』 吉川弘文館 十月

武 田 時 昌

家庭円満の秘薬はあるか 宝積 十四

宝積比較宗教・文化研究所 一月

田中 淡

中国——社会、文化『ニッポニカ』改訂版CD-ROM

小学館 九八年十二月

唐代都市の住居の規模と算定基準 岩波講座『世界歴史』第

九卷月報

岩波書店 一月

The Construction of City Walls in the Chapters on the  
Defence of Cities in the Mozi

The Memoirs of the Tōyō Bunko, 58, 1998 三月

田中慶太郎『日本古典籍書誌学辞典』 岩波書店 三月

漢代の建築『よみがえる漢王朝』読売新聞大阪本社 四月

明代の建築『世界美術大全集・東洋編 第八卷 明』

小学館 五月

作品解説・(蘇州)開元寺無梁殿／靈谷寺無梁殿／広勝上寺

飛虹塔／永祚寺双塔／塔院寺大塔／広徳寺多宝仏塔／(泉

州)開元寺大雄宝殿／円通寺大雄宝殿・八角亭・苑池／孔

廟奎文閣／(西安華覺巷)清真寺省心楼／経略台真武閣／

武当山金殿／西安府城／平遙県城甕城門／紫禁城五色土／

皇史宬／紫禁城御花園／豫園／奇暢園／明十三陵石牌坊／

定陵地宮 同右

元代の都市と建築『世界美術大全集・東洋編 第七卷 元』

小学館 十月

作品解説・居庸関雲台／周公廟觀星台／広勝下寺弥陀殿(前

殿)／広勝下寺大殿(後殿)／延福寺大殿／天寧寺正殿／真

如寺正殿／曹溪寺正殿／指林寺正殿／永安寺伝正法殿／妙

応寺白塔／阿育王寺塔／百八塔／永楽宮純陽殿／永楽宮三

清殿／北嶽廟徳寧殿／東嶽廟行宮大殿・猷殿／牛王廟戲台  
／聖姑廟三教殿／真教寺(鳳凰寺)大殿／蘇州城盤門

同右

●長物志一(共訳)(東洋文庫) 平凡社 十二月

田中 雅一

Himoki (Japanese Cypress) Lives Twice: the World of  
Tsumekazu Nishioka, a Temple Carpenter. In *Views of  
the Environment in Asian Countries: Their Relation-  
ship to Sustainable Development* (Asian-Pacific  
Center/The United Nations University).

一九九七年三月

●けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」第十回研

究会記録(共編) 株式会社けいはんな交流部 一月

●Living with Śakti: Gender, Sexuality and Religion in

South Asia (Masakazu Tanaka and Musashi Tachikawa

eds.) *Semri Ethnological Studies* No. 50 一月

Introduction: Writing on Gender, Sexuality and Religion in

South Asia. In Masakazu Tanaka and Musashi Tachika-

wa eds., *Living with Śakti: Gender, Sexuality and Re-*

*ligion in South Asia. Semri Ethnological Studies* No. 50

一月

The Navaratri Festival in Chidambaram, South India. In  
Masakazu Tanaka and Musashi Tachikawa eds., *Living  
with Śakti: Gender, Sexuality and Religion in South*

人文コンという異種交流 じんもんこん(特定領域「人文科学」とコンピュータ」研究情報誌) 第八号 三月

書評・青木保他編『紛争と運動』 民族学研究 第六三卷第四号 日本民族学会 三月

開所記念講演会・軍事共同体の文化人類学——『暴力の文化人類学』以降 人文 四五号 三月

ヒンドゥー教の葬式はなぜ火葬か? 月刊みんぱく編集部編『世界の民族生活百科』 河出書房新社 七月

地球化するヒンドゥー教 日印文化

供儀のゆくえ——コロニアル・インドとポストコロニアル・ランカ 栗本英世・井野瀬久美恵(共編)『植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ』 人文書院 九月

書評・Yuko Nishimura Gender, Kinship and Property Rights: Nagaratar Womanhood in South India. 南アジア研究 第十一号 十月

射精する性——男性のセクシュアリティ言説をめぐって 西川祐子・荻野美穂編『共同研究 男性論』 人文書院 十月

在日米軍の観光活動——その生活世界と日本観 旅の文化研究所 研究報告八 旅の文化研究所 十二月

富 永茂樹

サン・ジュスト、シエース、ラ・メトリー

富谷 至

●スウェン・ヘディン将来考古学術資料の総合的研究 平成八年度・平成十年度科学研究費(国際学術研究) 成果報告 三月

前漢の平帝——十四歳の少年に何ができたのか

呂后——「人の為すところにあらざる」行為をした女 月刊みんぱく 七月号

●유골의 증언——古代中国의 刑罰

사경문화사 九月

狭間 直樹

映画「宋家の三姉妹」と運命 朝日新聞夕刊 二月九日  
〔友 Iwanami Hall 夏〕No. 322, 7, 10 再録)

●世界の歴史 二七 自立へ向かうアジア(共著)

中央公論新社 三月

●孫文と華僑——孫文生誕一三〇周年記念国際学術討論会論文

集——〔孫中山記念会叢書Ⅲ〕(共編著) 汲古書院 三月  
〔支那保全分割合論〕をめぐる若干の問題——孫文来日初期革命活動の一側面——

近代日本への歩みに異議唱え続けた「明治の初心」  
『宮崎兄弟伝』アジア篇下 刊行に寄せて

熊本日々新聞 五月二八日

●共同研究 梁啓超——西洋近代思想受容と明治日本——（編著）

著）

みすず書房 十一月

「新民説」略論

『共同研究 梁啓超』 十一月

古松 崇志

唐代後半の進奉と財政

古代文化 第五一卷四号 四月

前川 和也

The “temples” and “temple personnel” of Ur III Girsu-Lagash, *Priests and Officials in the Ancient Near East: Papers of the Second Colloquium on the Ancient Near East (held at the Middle Eastern Culture Center in Japan, March 22-24, 1996)*, ed. K. Watanabe, Heidelberg, 1999, pp. 61-102.

真下 裕之

インドの図書館案内——イスラーム写本研究のために——

イスラーム世界 五二号 二月

Akbar Namah と Tabaqat-i Akbari —— mansab 制度史研究序説——

西南アジア研究 五一号 九月

水野 直樹

宇治川水電工事と朝鮮人労働者 『人權ゆかりの地をたずねて（乙訓・南山城編）』（京都人權啓発推進会議）

三月

●植民地期朝鮮・台湾における治安維持法に関する研究（科学

研究費補助金成果報告書）

三月

戦後日本社会と外国人の人權 『世界人權宣言五十周年記念「在日韓国・朝鮮人の人權状況」シンポジウム報告書』（京都弁護士会）

三月

共同研究の話題・日本の植民地支配——朝鮮と台湾

人文 第四五号 三月

在日朝鮮人の戦中・戦後 『第九回朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会』金沢 報告書（全国交流集会石川実行委員会）

四月

京都の在日のあしあと 『京都韓国民団史』（在日本大韓民国民団京都府地方本部）

四月

●人權歴史年表（世界人權問題研究センター編）（共同執筆）

第三海軍火藥廠朝来工場跡（人權ゆかりの地をたずねて）

山川出版社 六月

きょうと府民だより 第二一九号 七月

朝鮮人の国外移住と日本帝国

岩波講座『世界歴史』第一八卷 八月

麥谷 邦夫

唐玄宗『道徳真經』注疏之撰述与其思想特徵

道家文化研究 第一五輯 三月

森 時彦

梁啓超の経済思想 狭間直樹編『共同研究 梁啓超』

みすず書房 十一月

森 本 淳 生

Around de Zénon d'Elje la filiation finiste et Valéry, in  
*Paul Valéry, dialogues orient et occident*, Ed. Kunio  
Tsunekawa, Lettres modernes-Minard, 1998

Agathe ou la genèse du sujet. Valéry dans les idées con-  
temporaines, *Etudes de langue et littérature françaises*,  
no. 74, Société japonaise de langue et littérature fran-  
caises 三月

Le dédoublement impossible. Une lecture du *Memoire sur  
l'attention* ヴァレリー研究 (Valéry Kenkyu, Bulletin  
japonais d'études valéryennes)

日本ヴァレリー研究センター 四月  
「危機」のデイススクール——ヴァレリーと「ヨーロッパ精神」  
の隘路—— 仏文研究 第三〇号

京都大学フランス語学フランス文学研究会 九月

矢 木 毅

朝鮮初期の笞杖刑について 史林 八二巻二号 三月

安 田 敏 朗

●「言語」の構築——小倉進平と植民地朝鮮——

書評・塚瀬進『満洲国——「民族協和」の実像——』 三元社 一月  
図書新聞 二四二七号 二月

日本語論のなかのアジア像 西川長夫・渡辺公三編『世紀転  
換期の国際秩序と国民文化の形成』 柏書房 二月

書評・長志珠絵『近代日本と国語ナショナリズム』

史林 八二巻二号 三月  
「近代」化のなかの言語政策 庄司博史編『ことばの二〇世  
紀』 ドメス出版 三月

戦前・戦中・戦後の日本語教育に通底するもの(田中望との  
対談) 月刊日本語 十二巻五号 アルク 五月

「方言」の語り方と植民地——大東亜省調査官・寺川喜四男  
の場合—— 思想 八九九号 岩波書店 五月

戦争と地名——「大東亜戦争」の場合—— ことばと社会  
——多言語社会研究—— 創刊号 三元社 五月

戦前・戦後日本の言語事件史 戦前編 ことばと社会——多  
言語社会研究—— 創刊号 三元社 五月

●(国語と「方言」)のあいだ——言語構築の政治学——  
「正しい日本語」への懸念 人文書院 五月

朝日新聞(大阪本社版 夕刊) 七月一六日

山 室 信 一

書評・角山榮著『時間革命』 朝日新聞 一月一七日  
インドネシア——魂の共鳴 朝日新聞 一月二四日

日本外交とアジア主義の交錯 日本政治学会編『年報政治  
学・日本外交におけるアジア主義』 岩波書店 一月

書評・木畑洋一編『大英帝国と帝国意識』

朝日新聞 三月七日

書評・ヘルムート・シユテルン著『ベルリンへの長い旅』

朝日新聞 三月一四日

ラストエンペラーの悲劇『This is 読売』編集部編『二〇

世紀日記抄』

博文館新社 三月

●『中江丑吉文庫目録』

書評・細川周平著『シネマ屋、ブラジルを行く』 東洋学文献センター叢刊・第八号 三月

朝日新聞 四月一八日

丸山眞男との「再会」

朝日新聞 五月二八日

●校注『明六雜誌』(上)

書評・D・グッドマン他著『ユダヤ人陰謀説』 岩波文庫(岩波書店) 五月

朝日新聞 五月二二日

書評・上村希美雄著『宮崎兄弟伝・アジア篇』

朝日新聞 六月六日

書評・李登輝著『台湾の主張』

朝日新聞 六月二七日

書評・ケヴィン・ドーク著『日本浪漫派とナショナリズム』

朝日新聞 七月一日

梅原猛他と座談会『日本の思想』

読売新聞 七月三一日

『満蒙植民地経営』『満洲事変と満洲国』鳥海靖他編『日本近

現代史研究辞典』

東京堂出版 八月

書評・セルゲイ・クズネツォク著『シベリアの日本人捕虜た

ち』 朝日新聞 八月八日

佐高信・藤原作弥と鼎談『満洲・夢のまた夢』戦時統制国家  
の実験場』『シリーズ二〇世紀の記憶・大日本帝国の戦争』

毎日新聞社 八月

書評・ロナルド・シーガル著『ブラック・ディアスポラ』

朝日新聞 八月二九日

書評・ベンジャミン・ヤン著『鄧小平——政治的伝記』

朝日新聞 九月二六日

帝国の幻影ひきずる中国 毎日新聞(東京版) 九月二七日

井上毅の国際認識と外政への寄与

『国学院大学・日本文化研究所紀要』 第八四輯 九月

中村雄二郎他と座談会『二〇世紀の日本の思想』『二〇世紀

どんな時代だったのか——思想・科学編——』

読売新聞社 十月

声の力に魅了されて

朝日新聞 十月二七日

書評・日本裁判官ネットワーク編『裁判官は訴える!』

朝日新聞 十月三一日

書評・胡昶、古泉著『満映——国策映画の諸相』

朝日新聞 十一月七日

書評・フィリップ・アリエス著『歴史家の歩み』

朝日新聞 十一月二八日

社会史としての『官僚制』——水谷三公著『官僚の風貌』に

触れて デジタル月刊百科 十二月

書評・橋本聖哉著『竹中労・無頼の哀しみ』

朝日新聞 十二月十二日

朝日新聞 十二月十九日

今年と対談『ニッポン再論』熊本日々新聞 十二月二八日

山 本 有 造

講演記録・人文・社会科学と共同研究

- ノモス（関西大学法学研究所） 九号 九八年十二月  
●近代日本の南方関与（に関する戦後日本刊行文献目録（稿））  
（盛田良治と共編）

京都大学人文科学研究所山本有造研究室 三月  
選評・権上康男「フランス資本主義と中央銀行」

巻頭言・回顧十年 近現代東北アジア地域史研究会ニュース  
レター 十一号 十二月

横 山 俊 夫

- 扉の向こうの時間へ——けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」が贈る多次元のひととき——（企画・編集）  
株式会社 けいはんな 九八年十二月二四日

監修／校訂・Culture of Japan/Kites: Practical tools or playful toys?, *Sumitomo Quarterly*, winter 1998/1999, No. 75

編集／校訂・けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」——第十回研究会記録

株式会社 けいはんな 一月  
安定社会を明るくする——京都国際セミナーを終えて

毎日新聞夕刊（全国版） 三月三日  
NHKやきもの探訪 第2巻（深見陶治氏と対談）

風媒社 三月

- 平成八～十年度文部省科学研究費補助金基盤研究(A)(1)「久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究」

課題番号 08309006、研究成果報告書（共編著）

京都大学人文科学研究所 三月

- 文部省科学研究費補助金基盤研究(A)(1)「久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究／上江洲家・與世永家・吉濱家・宮城家文書目録（稿）」課題番号 08309006、研究成果報告書 別冊Ⅰ（共編著）

京都大学人文科学研究所 三月

「安定社会を楽しむ」は可能か——京都国際セミナー「〇周年記念フォーラム報告」  
京都新聞 四月六日

監修／校訂・Culture of Japan/Rhythm and Feeling in Paper and Ink, *Sumitomo Quarterly*, spring 1999, No. 76

四月

談話・まちひと100年の肖像（品川文男氏「回想のアルバム 京都市電」出版によせて）  
京都新聞 五月一日

ことば選びの感性——前近代日本の場合 第十二回 感性研究フォーラム「伝統にみる感性」

織維学会研究委員会 五月

監修／校訂・Culture of Japan/Painting the Summer Night Sky in Color and Light: Fireworks, *Sumitomo Quarterly*, summer 1999, No. 77

七月

編集・半半會だより 第五号 半木半読會 八月一日  
編集・とうんばらー通信 第十一号 科学研究費補助金／基盤研究(A)(1)「前近代久米島文化の復元」



京都大学人文科学研究所横山研究室 八月十日  
談・江戸期の庶民生活に迫る／研究室訪問

毎日新聞（関西版） 十月四日

日用百科の使われかた——小口の手沢相は語る—— 静脩

第三六卷二号 京都大学付属図書館 十月

監修／校訂・Culture of Japan/Building with the Vitality  
of Wood: Japanese Architecture, *Sunitomo Quarterly*,

autumn 1999, No.78 十月

共同編集・翻訳「京都大学人文科学研究所第二回第三者評価  
委員会報告書」 京都大学人文科学研究所 十一月

座談会・人文回顧Ⅱ 二一世紀を展望して 人文 第四六号

京都大学人文科学研究所 十一月  
編集・とうんばらー通信 第十二号 科学研究費補助金／基

盤研究(A)1「前近代久米島文化の復元」

京都大学人文科学研究所横山研究室 十二月八日

吉川 忠 夫

一本の木に咲く花 中外日報 一月二六日

汲冢書発見前後 東方学報京都 七一冊 三月

柳田禅学の舞台裏『禅学典籍叢刊』推薦文 臨川書店 四月

王羲之と道教 書論 三二号 五月

『真誥』こぼれ話 京大広報 五三八号 九月

范材——退転の沙門—— 中外日報 十月二六日

『中外日報』社説 一九回 一月、十二月

## 研究所のインターネット・ホームページ

本研究所では、1997年からインターネット・ホームページを設け、研究所に関するさまざまな情報の提供を行なっています。研究所・スタッフ紹介をはじめ共同研究、図書室、東洋学文献センター、刊行物などの情報が掲載されています。

また、「中国関係電子テキスト・アーカイブ」「西域行記データベース」などのデータベースのほか、教職員個人のホームページにも「漢籍テキスト・データベース」(麥谷邦夫)、「e 漢字」(勝村哲也)、「戦前日本在住朝鮮人関係新聞記事検索」(水野直樹)、「南インド寺院管理判決文データベース」(田中雅一)などの学術データベース類があり、インターネットを通じての学術情報の発信に努めています。

本誌「人文」も、ホームページに全文掲載しています。

情報満載のホームページを一度ぜひご覧ください。URL は、以下のとおりです。

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp>



English version is [here](#)  
2000年3月15日更新

### ●最新情報(00/3/15更新)

#### 研究所紹介

- 沿革
- 組織一覧
- 交通と地図

#### スタッフ紹介(個人研究・主要業績紹介)

- 日本部
- 東洋部
- 西洋部
- 客員部門

#### 共同研究紹介

- 日本部
- 東洋部
- 西洋部

#### テキスト・アーカイブ

- 中国関係
- 西域行記データベース
- e 漢字
- その他データベース一覧

#### 図書室

- お知らせ(99/10/1更新)
- 利用案内
- 本館図書室の蔵書

#### 東洋学文献センター

- お知らせ
- 利用案内
- 蔵書と資料
- 東洋学文献類目検索
- 事業活動

#### 刊行物

- 研究報告
- 調査報告
- 資料集・索引等
- 共同研究資料集刊
- 刊行物目次・概要(99/11/9更新)

#### 紀要総目次

- 東方學報(京都)
- 人文學報
- ZINBUN

#### 所報『人文』

- 第45号(1999年)
- 第46号(創立70周年記念)

[研究所教職員のホームページ](#)(98/10/7更新)

人

文

第四七号

二〇〇〇年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品